KULIC

9

1976. 9

慶應義塾大学研究・教育情報センター

Keio University Libraries & Information Centers

KULIC 9

目　次

新所長の抱負

1……少しでもパイプの役割を　保崎秀夫
2……三つの課題　堀内敏夫

特集・私の研究とライブラリー

5……三田情報センターへの提言　大島通義
9……迷路彷徨　松原秀一
8……アジアの言語とライブラリアン<ティールーム>　坂元勉
12……ロー・ライブラリアンの必要<ティールーム>　小林節

13……信頼性の高い書籍販売サービスの確立　渋川雅俊
19……洋書取次業に従事して　岡本正三
23……企業体研究者の情報利用の実態と大学図書館への期待　高山正也
4……日々憂うること<スタッフルーム>　石黒敦子
18……ニューヨーク大学図書館<ティールーム>　佐藤孝
22……おいしいケーキのはなし<スタッフルーム>　清水和夫
28……三田情報センターの特殊コレクションについて　石川博道

資　料

29……昭和50年度私立大学研究設備整備費補助金による購入図書資料一覧
32……年次統計要覧<昭和50年度>

36……編集後記　〈表紙〉孫福弘

KULIC第9号＊1976年9月1日発行＊編集人 安西郁夫＊発行人 高島正夫
＊発行所　慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務室　〒108 東京都
港区三田2—15—45＊電話（453）4511（内線 3027～8）＊印刷所　梅沢印刷＊

新所長の抱負

着実な歩みを目指して

少しでもパイプの役割を

医学情報センター
保崎 秀夫
（医学部教授）

嶋井前所長が医学部長になられたため，急遽所長をお引受けすることになりました。伝統のある医学情報センターの歴代所長のような立派な業績も人格ももちあわせませんし，今までは基礎系の先生があたっておられたものですから（基礎系とか臨床系といっても人間には違いありませんが，基礎系の先生方は一口にいえば生真面目で几帳面でスジを通す方が多いといえます），臨床系の私にはとても無理だと再三お話ししたのですが，「所長はセンター運営上のあまり細かい問題にまで首をつっこむ必要はなく—それはむしろ具合がわるいことで—医学部はじめ三田との間のパイプ役を果してくれればよい。私でも勤まった位だから」という医学部長の説得に負けて遂に引受けてしまいました（KULIC8号をみますと，全く同じセリフで嶋井前所長は前々所長より口説かれていることがわかりました）。

◇意思疎通をはかる

さてお引受けしたものの，情報センターに関する知識にも乏しく，事務局の特訓をうけるたびに，認識の甘さと事の重大さを痛感している次第です。

実務の方は海老原副所長をはじめベテランの職員の方々の永年の努力で医学情報センターとしての機能を，種々の困難の中にあって最大限に発揮しており，関係諸方面より高く評価されているのは周知の事実です。しかし財源難や物価高から，一時は相当数の継続雑誌の購入を中止するなどの強硬手段をとらざるを得ない事態もあって，利用者に不便をおかけしたということもありました。

幸いにして塾当局の御配慮によって二年つづいて予算はアップし，且つ医学部先輩の窮状をみかねての御寄付が増したことにより，来年度からは雑誌の購入がある程度可能な状況になってきたことは，喜ばしいこととおもっており，関係各位と先輩の御努力によるものと感謝している次第です。

さらに医学情報センターとこれを利用する教職員をはじめとする皆様との間の意思疎通をはかり，積極的な御意見をいただくために，ニュースレターの発行や，医学部その他へのPRの徹底，協議会の意見の吸収など，よりよいセンターのあり方をめざした動きも企画されていますし，スペースがないため疎開中の書籍も出来るだけ早くもどす予定となっています。

今後の問題としては，予算面は好転しているとはいえ尚理想には程遠いため増額をお願いすることと，スペースの確保の問題があります。とくにスペースにつきましては，医学情報センターの機能が充分果されるのには今のスペースでは余りにも狭すぎます。といっても歴史ある北里図書館の外観は，変えにくいとおもいますので，それを配

慮したスペースの拡充，獲得が問題となりますが，これには当然予算も関係しますし，簡単にゆくとはおもいませんが，是非何とかいい方向へと願っています。

◇「財団」との関係を円滑に

医学情報センターと密接な関係にある財団法人国際医学情報センター（以下財団と略します）は今般牛場大蔵教授を理事長に迎え（橘本理事長亡きあとは外山敏夫教授が代行しておられましたが）新しい歩みをはじめました。両者の関係は，医学部内にあるものでも理解しにくいものですが，これは敷地や業務の関係で当然のことかもしれません。しかし塾と財団との契約更改期が来年にせまった今日では是非この二つの関係を周囲に充分理解していただくとともに，相互に密接な連絡をとり円滑な関係を維持する様努力することが必要と考えています。幸い財団の牛場理事長，外山常任理事は前の医学情報センター所長であり，塾の研究・教育情報センターの高島所長，塾の千住，山本，関口の各理事が，理事もしくは監事として参加されていますので，必ずや旨くゆくものと信じています。

いずれにしても医学情報センターのかかえている問題は塾当局，医学部当局をはじめ各情報センター関係諸部門の御理解と御協力をいただいてはじめて解決しうるものとおもいますので，宜しく御指導，御示唆，御協力をお願いし，パイプの役を少しでも果したいとおもっています。

どうぞ宜しくお願いします。

情セ本部メモ

保崎秀夫君（精神神経科）は，任期途中で医学部長に転出した嶋井和世君の後を承けて昭和50年10月1日から医学情報センター所長に就任した。任期は前任者の残任期間で昭和52年3月31日まで（50年度第2回情報センター協議会の議を経て塾長が任命）。

三つの課題

理工学情報センター
堀内　敏夫
（工学部教授）

研究のことならば，自分にとっても学生諸君にとっても，仕事の過程で起こり得る問題点の予想が或る程度可能である。しかし，これまで単なる利用者として気楽に出入りしていた図書館に責任を持つとなると，個人的には極めて重苦しいものである。

◇人の頭が刈れるか

実験室で学生諸君と話しているうちに新しい事実とか，手がかりが出て来ることが多い。それが文献として既に発表されているかどうかは非常に気になることであり，何とかして調べたいものだと思う。若し関連のある文献がわかれば，一刻も早くそれが見たいし，図書館にそれが在れば猶更である。文献の巻号を確かめ，ページをひらくときのゾクゾクする感じは研究の原動力の一つである。これまで私が感じた図書館はそんな存在であった。自分の見たい本が在る処が私の図書館のすべてであり，他の本はそのとき目にもとまらないのである。獲物を追う猟師のように極めて個人的な意欲だけが図書館と私との結びつきであり，図書館全体と私の責任とは無関係の場であったと云うことができる。これまで50年床屋で頭を刈ってもらった男が，或る日突然，床屋になって人の頭が刈れるものだろうか。これが私に与えられた第一の課題である。

◇学生用図書にもっと重点を

この課題が頭にあったせいか，５月下旬にアーヘンの大学を訪れたとき，友人のW教授に今度図書館の仕事をする事になるだろうと云ったら，参考のために新しい大学の図書館に連れて行ってやろうと云われた。彼は今年停年を迎えるので，その後は研究所に行くよりも図書館で多くの時間を過ごすことになるようで，彼にも身近な存在になりつつある処である。この図書館は数階建の立派な建物であるが，あまり学生は見当らず，特に新着雑誌の展示室には女性職員が一人で坐っていた。並んでいる雑誌には特別なものもなく，また，「一体図書館はどのような機能を果すべきものだとお考えになりますか」等と聞くのも変な気がして，結局30分ばかりうろうろした後で出て来てしまった。しかし，其処に在ったのは実に図書館そのものであり，一見活気が無いとも思われる雰囲気の裏には，ヨーロッパ特有ののんびりしているが着実な仕事のやり方がひそんでいると云える。彼等の研究と同様図書館にしても，一刻を争う場所ではなく，大げさに云えば，中世の埃さえもモダンな外見につつまれて保存されているように思われた。

我々の理工学情報センターは，小金井の図書室として終戦後に発足したものであるため，日本的な，あるいはアメリカ的な，性急な研究者の要求を満足させるために研究に強くオリエントしているのが特徴である。それだけに我々教員にとっては最小限の要求は十分満足したものであるが，学生諸君の参考書について見ると，研究レベルの図書に比べてバランスを欠くようである。大学は研究によって新しい知識を発見すると同時に，それを学生諸君を通じて未来に引き継いで行く使命があり，研究と教育の一致はその生命である。これからは学生用図書と研究用図書のバランスについて少し考える必要があるようである。しかし，少ない予算で何ができるだろうか。これが第二の課題である。

◇本筋を見失わずに

第三の課題は理工学情報センターと云う名称から来るようである。少なくとも，図書館と云う方が短かいし，わかり易い。名前が長くなると，何か内容が図書館より高級にならねばならないような気がするのである。しかし，学問はいくら進歩しても学問であるのと同じに，名前は気にしなければよいのであって，私はむしろ，このような名前をつけた事によって慶應義塾は図書館に対するその意気込みをあらわしたものだと受け取っている。この点で塾当局に期待する処は大きい。

工学部に数理工学料が新設され，数学関係の図書が整備され始めた。この事は工学部にとって非常に重要な意味を持つ。特に，数学そのものを研究の対象としない研究者にとって数学関係の図書は重要である。それが日常目に止まるか否かは，専門でない者にとって決定的に影響するものである。数学でわからない事があれば先ず図書館に行けばよいのであって，一般の学生諸君にも非常な価値があると云わねばならない。

名実共に備わった研究・教育情報センターを完成させるためには，今後長い時間が必要であろうと思われる。目前のことに気をとられることなく，また本筋だけは誤らずに進んで行きたいと考えている。利用者各位の御鞭撻を切に望むものである。

情セ本部メモ

◇堀内敏夫君（計測工学科）は前任者阿部芳郎君の任期が満了したのに伴って本年４月１日付で理工学情報センターの新しい所長に就任した。任期は53年３月31日まで。

◇日吉情報センター所長には，三沢進君（法学部教授）が引続き就任した。任期は53年３月31日まで（各所長は昭和51年度第１回研究・教育情報センター協議会の議を経て塾長から任命された）。

日々憂うること

石黒敦子

雑誌室で仕事をするようになって，二年と幾月かが過ぎた。種々ある仕事の中で，一番時間の浪費のようでつらいことは，紛失雑誌の処理と返却延滞者への請求である。どちらの問題も利用者の良識の如何で不必要になることであるだけに残念である。

私たちの部室には約1,900タイトルの開架雑誌があり，利用者はその書庫には自由に出入りができる。大きな荷物は持ち込みを禁じているが，ハンドバックあるいはコートまで厳しくはしていない。従って，その気になれば未製本の雑誌は持ち出すことは容易といえる。又，閲覧室には，約270タイトルの新着雑誌を雑誌架に展示してある。閲覧室までは荷物すべて持ち込み可であるので，完全に利用者のモラルにまかせてある状態といえよう。

こうした状況の中で，月に15～20冊の新着雑誌の紛失がある。論文の切り取りも頻繁に発見される。雑誌架に配架したとたんに紛失するような要注意誌は，自然新着の展示を中止することになる。本来，展示はブラウジングが目的であるにもかかわらず，こうした結果，重要誌は次々展示架からはずされ，需要の少ないものが並ぶことになる。

切り取りは，二月の試験シーズンが近づくと続々と発見される。この防止の意味もあって，昨年より Self-Service の複写機が取り入れられ，利用者は開室時は常にコピーが取れるようになった。しかし，この工夫は又一つの弊害を呼んだ。よいコピーを取りたい一心で，本を割り，体重を乗せるようにして押さえつけるため，製本誌の損傷が目立つようになったのだ。私たちは，利用者の多い塾の雑誌の未製本のセットを，コピー用として揃えた。利用者との知恵比べのようで切ないが，製本の修理にも限界があり，その度に本ののどは切り刻まれていくことを考えると，対策を講ぜずにはいられない。

又，館外貸出しは大学院の博士課程の学生と教職員にのみ認められているが，期限が守られないことが多い。それも何年も返却催促を無視して連絡しない人が多い。何冊も借りたまま，卒業・退職していく人もいる。返却請求のために，貸出表を調べ書架をチェックして葉書を出す作業は，思わぬ手間がかかる。そして，その手間の割に効果が少なく，いつのまにか年月が経過することになる。これでは目録カードはあってもなきに等しい。いや「ない」よりも始末が悪いかもしれない。欠号ではないから欠号補充もできず，半永久的にその書架は埋まらないからだ。

利用者は，自分一人でないこと，図書館の本はあくまで公共物であることを自覚してほしいと願わずにはいられない。心ない利用者のために図書館のサービスは低下し，展示雑誌架の増設も，未製本の貸出しもためらうことになる。発展著しい世の中，論文量は増大し，それに応じて図書館への依存度も高くなるに違いない。又，コピーの普及は止まることを知らない。そうした状況下で，私たちが「保存」について考慮工夫するのは無論だが，それと同時に利用者にも未来に引きつがれ，生き続けるべき資料に関して，もっと責任をもってもらうことはできないだろうか。利用者のモラルの向上が伴えば，図書館のサービスもより良いものになっていくに違いない。

（三田情報センター職員）

三田情報センターへの提言

大島通義
（経済学部教授／財政学）

この主題のもとで私に求められているのは，実は，遠からぬ将来に予想される研究室L字型書庫増設に向けて考えておかねばならぬ問題点について私見を述べることであるらしい。適当な意見を開陳できるかどうか覚束ないが，図書館の教育的機能に関する問題は一切除外して，研究との関連にかぎって二三のことを以下に述べることとする。

なお，参考までに，主題に関連するかぎりで自己紹介をしておくと，私の専攻は財政学，とりわけドイツ財政史の研究であり，当面はナチス財政が関心の対象となっている。図書館利用の経験としては，慶應以外には国会図書館を利用しており，外国では，ケルン大学とキールの世界経済研究所の図書館，ミュンヒェンの現代史研究所の図書館および文書館，連邦文書館などを利用したことがある。

*　*　*

1.　1920年代初頭の美術史家A・ワールブルクと哲学者E・カッシーラーの出遭いの物語は，山口昌男『本の神話学』の記すところだが，この出遭いの最初は，個人的に蒐集した尨大な文献を中心に形成されたワールブルク文庫を訪ねたカッシーラーが，その蔵書の独自の分類，たとえば「哲学に関する書物を占星学と魔術と民俗学に関する書物の次に並べ，美術の部門を文学と宗教と哲学の部門と組合せ」るその分類に驚き魅了されたことにある。カッシーラーは，後に『象徴形式の哲学』として形成される彼独自の哲学の構想に極めて近い問題意識をこの文庫に見出して，それ以後この蔵書群を次々とあさって多くの思考上の滋養分をそこから吸収していった，と言われる。このことは，収集され分類された書籍とその利用者との間に形成される関係のひとつのあり方を明瞭に示したものであると言えよう。

今や数十万冊の蔵書を擁する三田研究教育情報センターにおいてこうした関係が成立ちうるかといえば，差当りは否である。これに似た状況を創りだすことができるとすれば，それは研究者個人のレヴェルにおいてであり，それも個人的な蔵書の所有などは遠い昔の話で，いまはせめて机上にある文献目録の中に自分の世界を確保するのが精一杯といったところである。その結果，ある研究者が自らの問題意識を何らかの知的創造にまで結実させるには，昔にくらべて遙かに大きな度合で研究室や図書館の蔵書や施設に依存している一方，その研究者の問題意識と必要は広汎で極めて多様なものとなっているのが現状である。三田情報センターのあり方からすれば，こうした利用者の多様な関心に適応するために，その蔵書の収集と整理は万人向けの，平均的でともすれば非個性的なものとならざるをえない。そのことはまた，ひるがえって利用者の側の問題意識を不毛なものにし，その知的創造力をなえさせる結果ともなりかねない。

2.　ところで，私が自分の研究に必要な文献情報をどのようにして手に入れ，また，必要な文献にどのようにして接してゆくかをふりかえってみると，まず文献についての新しい情報を手に入れるのは，前記の現代史研究所が定期的に刊行する新刊目録，同じ分野の研究書に付された参考文献

目録，国内および国外の書店の出す新刊カタログによる場合が多い。これに基づいて発注し研究室で購入する図書は，選定の段階で目を通し部門を指定するから，その利用は記憶と自分の手許の目録によって直ちに可能となる。三田にすでにある文献は，総合目録で所在をたしかめることになる。正直な話，ドイツ現代史に関するかぎり，現存の分類目録を使うことはほとんどない。

この場合かねてから疑問としていることは，三田における選書の方式が書店の持込んだ書籍から選び出すというやり方を主としていると思われる点である。こう見て誤りでないならば，我々の購入すべき図書をこれ程まで書店の側の判断や撰択に依存させてよいのかという疑問が残る。書店の役割にそれなりの有用性があることは勿論だが，書店が新着洋書カタログに掲載し三田に持込む書籍に，我々が必要としているものが必ず含まれているという保証はないからである。こうした受身一方の選書方式は変えられなければならない。

その改善策として，我々自身が内外の文献情報から必要な文献を選び出して購入し，さらには，三田に欠けている文献で必要なものを探索して補充してゆく方式を確立すべきではなかろうか。問題は，恐らく「我々」とは誰なのか，であろう。各学部の図書委員会は今後とも維持されて然るべきだし，不断に流入してくる文献を選別するルーティン・ワーク的な活動にとっては，この主体を欠くことはできない。これを「定型的」な収集活動とすれば，これと並んで「不定型」なそれがあってよいのではなかろうか。我々自身の問題意識と必要から書店のオッファーを超えて，また過去にも遡って蔵書の充実を図ろうとすれば，そのための調査や交渉は，研究者個人のなしうるところを超えるものがあり，この点でいわゆるライブラリアンの貢献が期待されると思う。これを「不定型な」収集活動と呼ぶのは，この方向での蔵書の充実は研究者（個人または集団）の固有の問題意識によって媒介されることが望ましく，定型的な収集活動のもとでこうした志向を活かすことは必ずしも容易ではないからである。

この種の作業は，今でもすでに収書課の一部で萌芽的ながらおこなわれている。望みたいことは，人員の面でも予算の面でもこれが一層充実され，実務的な能力とともに人文・社会諸科学の素養も身につけたライブラリアンが，教員と意見や情報の交換をはかりつつ文献収集の共同作業に従事することである。予算面では，学部毎の図書予算の枠外で，従来の助成金相当分も含めてある程度ゆとりのある資金がこのために確保されることが必要であろう。将来に個性ある蔵書と知的生産物を遺そうとするのであれば，それは決して無駄な支出ではない。

3.　先に，私は分類目録をあまり使わないと書いたが，それでも，ことに新しい研究に取りかかる場合にはまず過去の関連ある業績を確める必要があり，よく整備された分類目録がそのために役立つことは疑いない。

この点について三田情報センターが直面している問題は，研究室図書の分類表統一であり，すでにセンター内部では，ＮＤＣまたはＮＤＬＣ（国会図書館分類法）が適当であるという意見が確認されている。研究室独自の分類表が，蔵書数の著しい増加やその構成の複雑多様化した現状から見て不適当であるという判断には，もはや異論の余地はないのではないか。ただし，従来のように学部毎に分類表が存在する場合には，選書の段階での部門指定がそのまま図書の配架上の位置決定につながっている訳で，その意味で，あらためて目録によってその図書の所在を確める必要なしにこれを手にすることができるという便宜があったことは事実である。また，従来の分類によって成立ったコレクションが崩されると研究上の障害が生ずるといった懸念もある。だが，こうしたことと，現行分類表の不合理な点や無意味な点を秤量して考えるならば，新しい分類表のもとで研究上の便宜をできるだけ確保するという結論になるのではなかろうか。

そこで，新しい分類表としてＮＤＣとＮＤＬＣ

のいずれが適切かという問題になると，図書分類についての専門的知識を欠く私には容易に判断できない。思いつき程度の意見を述べるならば，新書庫増設以来すでに十余年にわたってNDCが採られてきたことを考えれば，屋上屋を重ねないという意味で，研究室図書についてもNDCを採るべきだということになるであろう。しかし，両者の分類表の大要を見るかぎりでは，NDLCの方が文科系四学部を擁する三田の場合には適切であるように見える。下位分類まで見ないと断定はできないが，従来のコレクションを過度に分散させないためにもNDLCの方がよいのかも知れない。いずれにせよ，従来の分類表とこれらの新しい分類表とがどのように対応するのかを概括的に示すことも含めて，早急に分類表統一の問題を詰める必要がある。L字型書庫の増設の時期を無為や不決断で迎えてはならないからである。

分類表の統一が焦眉の急となっているときに別の問題を出すことには些か気おくれがするけれども，できることなら合せて考えてほしい問題として，次のことを指摘しておきたい。それは，分類目録はNDCまたはNDLCのいずれかのみでよいのか，検索システムの完全を期すならば，著者名別目録とこの分類目録以外に第三あるいは第四の，別の規準による目録もあるべきではないか，という問題である。現代史研究所の図書館には，著者名別目録と分類目録（23の主要項目とその下位の細分類からなる）の他に，地域別目録と人物別目録とがある。キールの世界経済研究所の場合にも，同様に複数の規準からなる目録が整備されている。このうち地域別目録は，兼ねてから問題とされている地域研究の必要に応えるものともなりうる。だがそれ以上に，一般的に見て，自分の研究において考察の対象とすべき文献を，分類目録以外にもうひとつの別の規準による目録を使って，いうならばクロスさせて浮び上らせることの必要と利点は極めて大なるものがあると思われる。それを手仕事と勘でやる場合には，効率も悪ければ見落しも生じやすい。研究室図書について分類表を統一するにあたって，是非この点についても検討を加えて頂きたいと思う。

4.　ところで，現在の研究室の書庫棟3階の北側にある辞書類と目録類の置かれている部屋は，最近では，辞書などを閲覧する場所というよりも，未整理の定期刊行物を置き整理する場所になりつつあるように見える。もともとゆとりのない空間に多くの機能を押し込まざるをえなかったことの結果だろうとは思うし，辞書類の利用は稀だという意見もあるかも知れぬ。だが，それでもやはり私には納得のゆかないことである。

この問題は，L字型書庫の完成を待つことなく解決されねばならないが，そのうえで増築完成の折には，この点も含めて空間の利用の仕方について慎重な考慮が払われなければならないであろう。ひとつの具体的な案は，情報センターの一角に，辞書・辞典類の閲覧が可能で，また，塾内外の図書館の目録・索引類の一切を集中して保管し利用できる排他的なレファレンス兼目録室を設けることである。

分類目録が整備されるならば，それは著者別目録がいわば引く目録であるのに対して，これは読む目録として利用されることになる。その場合には，カードボックスがただ並んでいればよい訳ではなく，読める場所が必要になる。また，ここでは，少くとも三田情報センターに関するかぎりすべての，できれば，付属研究所なども含めてすべての蔵書目録の検索を可能にし，また書誌類も整備してすべてここで利用できるようにしておくことが望ましい。そして，とくに「排他的」としたのは，こうした機能と整理作業などとを空間的にはっきり区別すべきだと考えるからである。

空間の効率的な利用への配慮は勿論必要だけれども，閲覧や検索のために十分な条件を空間的にも確保するという利用上の便宜についても，同じように配慮されねばならない。三田情報センターにおける空間利用が今後とも単なる予算上の考慮や機能本位に堕することがないよう関係者の配慮を願いたいと思う。

アジアの言語とライブラリアン

坂本　勉

「ペルシャ語」――と聞いて大方の人は何を想像するであろうか。蛇がのたくった体の一瞥したところ速記と見間違えるような識別し難い文字，イランの公用語であろうが，所詮，我々日本人にとって無益でいらん言葉――というのが正直な感想ではなかろうか。そのペルシャ語をどこでどう道を踏みはずしたのか病い膏肓に入って教える身となってしまった私であるが，不思議なもので毎年，ペルシャ語の授業を開講する時になると類は友を呼ぶのか結構，オリエントのロマンに魅せられたディレッタントの士が集るものである。そうした中にきまって一人位，図書館・情報学専攻の学生がいる。かれらがペルシャ語という不可思議な語学を履修する動機は毛色の変った未知なる言語への飽くことなき知的興味からとあと一つは最近，とみに増してきた中近東の情報を整理するために役立てるという明確な目的意識に裏づけられたところからであって実に頼もしい気がする。

ライブラリアンの仕事は文献の収集，整理，分類，情報サーヴィスを使命とする以上，言葉との付き合いは終生，断ち切ることのできない星の下に生れている。しかし，現在，ライブラリアンが不可欠とし，教育システムの見地からみても慣れ親しみ，偏重せざるをえない言葉は依然としてヨーロッパ諸語であってアジアの言葉は文献も少く重要性を感じつつ積極的意味を見出せないというのが恐らく悲しむべき現実のようである。

ところが，先般のオイル・ショック以来，中近東への認識が深まり文部省も重い腰を上げて雀の涙ほどであったこの地域に対する科研費を増額した。アジア関係の専門的な図書館・研究所である「東洋文庫」はこれによって従来，夢にも考えられなかったハケタの図書予算を獲得し，早速，アラビア，ペルシャ，トルコの書籍を現地から取り寄せるプロジェクトを組んだのだが，時が経ち現地から本が届きはじめて困った事態が生じてきた。肝心の図書を整理することのできる要員がいないのである。そこで大学院クラスの学生でこれらの言葉が解る人を臨時のアルバイトに雇って急場をしのいだが，ここでつくづく痛感されたことはアジアの言語を理解できるライブラリアンの協力が絶対に必要であるということとそうした人の養成が急務であるということであった。

アジアの言語と一口にいうが，英，仏，独，露，伊があればなんとかカバーのできる欧米とちがい，とてつもなく多様である。それは単に数が多いというばかりでなく，文字がアルファベットのような統一されたものでなく，しかも印欧語でひとまとめにされうるような同じ語族でない複雑さである。このことは東アジアの朝鮮，中国，ヴェトナム，インドのサンスクリット，ヒンディー，ベンガル，中近東のアラビア，ペルシャ，トルコといったごく限られた主要な言語を取り出してみるだけでも自明のことである。

しかし，この言葉の数の多さと習得の困難さを前にして目をつぶっていてはアジアの一員を自負する我が日本の責任を回避することになりかねない。第三世界抬頭の流れの中でアジアの人間は自分たちの言葉でものを書き，発言するようになってきた。これからは情報の在り方が今までと随分，ちがってくることが予測される。これを無視しては時代の推移に遅れるばかりであろう。たとえば，ヴェトナムにおいて戦闘行為そのものは確かに終ったが，長かった反植民地，反米闘争の歴史の叙述はまさにこれから始まろうとしている。ヴェトナム人民は三十年の戦いの期間より長い時間をかけてこれから怨念をこめて夜を日につぎヴェトナム人自身の言葉で苦難と勇気に満ちた歴史を編んでいくであろう。私たちがその成果を真摯に正面から受けてとめていくにはやはりかれらの言葉を理解し，その文献を集めていくことが急務なのである。

（文学部助手）

迷　路　彷　徨

松　原　秀　一
（文学部教授／仏文学）

研究と云うよりも雑学趣味の筆者には文学部の副手になって自由に書庫の中を歩けるようになったのは，無給の待遇をつぐなって余りあるものであった。しかし無給では暮せないので午前中はフランス大使館文化部にアルバイトに行っていた。20年前のことになる。午後三田に行くと毎日のように書庫の中を探検した。旧書庫しかなく，狭い所に本があふれ，棚に横に差した本の上に本が積んであったりした。当時は中世文学をやる気はなく現代仏語の意味論や文体論に興味を持っていた。1947年に出た L. R. Wagner の仏語学書誌 *Introduction à la linguistique française* を片手にカードを索き架蔵の有無をチェックしてフランス語学に関して如何に塾図書館が貧弱かを如実に知らされた。神田で Diez の「ロマン語比較文法」の仏訳を見付け，紀伊国屋の店頭で Vossler の諸著を見付けて持込んだりした。今は基本的文献とされている Th. Gossen の「中世ピカルディ方言文法」を２回返本の棚に廻され，恐る恐る野村館長の所に陳情に行ったのを想い出す。「この位の文法書は自分で買いたまえ」と云われたが買上げて下さった。小林英夫氏の訳でフォスラーを読みイデアリスムの言語観に興味を持っている所に教文館の棚にクローチェの全集を見付け購入をお願いに行き野村館長に「こんなの本当に読むのかね」と云われた。館長自身の所蔵本に買足され架蔵して下さったが，留学で実証主義の洗礼を受けその後読んでいない。今B59の棚のクローチェを見る度に負目を感じる。

図書館で忘れ難いのは留学直前の暑い日の事である。夏休みに入った週で午後も大分過ぎていた。Mの所に入って行くと長身の厨川先生にパッタリ出会った。筆者は盲腸炎の手術後で９月にヨーロッパの船旅に出る所であった。健康状態を尋ねられてから先生は留学の計画をきかれ是非中世仏語をよく習って来るようにすすめられた。文法論や意味論は日本に帰ってきてからでも年をとってからでも出来る，中世は若い中に本場で習うのが一番で，すべての基礎となると云うことを淳々と説いて下さった。風の通らぬ書庫の７月の午後である。先生の温顔に汗があとからあとから流れていた。先生はその時 Bossuat の中世仏文学の書誌の名を挙げられ，パリに行ったら第一にこれを買うことをすすめられた。

40日の船旅でマルセイユに着き，600キロを汽車に乗ってパリに着く。途中でうんざりする程長い旅であった。Wagner 先生の教室に出る，留学生課ですすめられて Boutière 先生のクラスに行く，マルティネの言語学教室に行く。一々教室を探すのが大変難儀であった。古本屋を少しづつ覚えて行き d' Argences 書店に行き当る。Bossuat の *Manuel bibliographique de la littérature française du Moyen Age* (1951) を尋ねると補遺が前年に出てセットで80フランである。350フランの給費なので先ず本体のみ欲しいと云って見たが駄目である。大いに迷っていると店主フェラン氏が出てきて「迷う事はない，残部僅少」と云う。思い切って買った。それ以来20年間，この本を開かぬ週はないから安い物だが買った時は心細かった。留学一年目は何処に行っても心細い想いをした。ソルボンヌの図書館に入ってカード箱の

前で茫然とする。カードを書いて出しても貸出中の事が多い。大体教室できいた本を請求するのだから，筆者なぞが請求する頃には貸出されているのは当然なのだが，それに気付いたのは2，3年経ってからであった。仏語学教室の図書室に行けばいいのだが，それに気付かないし，全く途方にくれた。Koschwitz の *Altfranzösische Übungsbuch* を見る必要があったが，ソルボンヌの図書室に6部あってどれも見られない。最後のカードが返って来ると「禁貸出」のスタンプである。理由をききに行くと肩をすくめるのみで答えてくれない。カードボックスに戻って調べると著者の書込み初版本である。Bibliothèque Nationale のカードを貰って地下のカタログの部屋に入ると，これが大変な広さで色々なカードボックスと壁の至る所に参考文献がある。手が着けられない。どこに行っても途方にくれていた。文体論とか意味論と云っても取付く島がない。中世仏語のルコワ先生のクラスを探し二週間目に辿り着くと学生は写本の写真を配られて読んでいる。筆者に渡された写真をいくら眺めても問題にされている箇所がどこか解らない。実に惨めな想いであった。古文書入門のクラスを探し当てて行くと幸い Boutière 先生は非常に親切に指導して下さった。小人数（30名程）の教室でロマン語比較文法とプロヴァンス方言（中世，現代）と組んで4時間のセットになっていた。先生は病身で休講も多かったが，授業のあとよく部屋に学生を招んで相談をうけられた。図書館で Koschwitz が読めなかったと申上げると「何故この図書室で読まない」と不審そうに訊ねられ，このソルボンヌの別館内に「ロマン語プロヴァンス語研究所」とその図書室があることを初めて知った。行って見ると学生に必要な参考書は大抵ある。プロヴァンサル抒情詩研究で属目され夭折した István Frank 氏の蔵書が全て収めてある小部屋で殆んど誰も来ない。ここに通い翌年にブーティエール先生に部屋の番を週二日依頼され二年間番人を勤めた。古文書の勉強法を伺うと「それは古写本を見ることだ」と云われ Bibliothèque Nationale の写本部に紹介状を下さった。写本部の閲覧室は印刷本の部屋よりはるかに小さく，席も割に明いている。

素人は怖いもので先ず借りたのが N11e Acq. 1104 と云う13世紀の有名な写本である。これで Le lai de l'Ombre を Orr の校訂本を持って行って比較し乍ら読んだ。この写本は Marie de France の lais を多く含んでいる有名な写本で，今考えても図々しいことをしたものである。写本部に行ってカタログを読むことを覚えた。古写本計りでなく最近の作家の原稿まで受入れ順に番号がついている。部屋の片側の壁面はビッシリとレファレンスの本で，窓側の本箱には *Romania, Notices et Extraits des Manuscrits, Bibliothèque de l'Ecole des Chartes* 等の定期刊行物が革装で並んでいる。ここでロマニア誌を創刊から10年分読んだ。第8巻に前述の写本中の lais を G. Paris が校訂している所から読み始め，創刊から順に読む気をおこした。筆者の中世仏語入門はロマニア誌と質問に対して丹念に返事を下さる厨川先生の書簡であった。ロマニア誌の書評は大変基礎的知識を得るのに役立った。読んでいるうちに *Histoire littéraire de la France* 第27巻を見る必要が出て来た。司書にきくと印刷本部の入口の傍にあると教えられ段々，大抵の参考書は開架式に見られる事が解って来た。塾では貴重書になっている Richelet, Bayle, Morelli の辞典も一組はレファレンスに出ているし，ラテン・ギリシャ対訳叢書，Voltaire, Stendhal 等フランス文学の古典になった作家の全集も，閲覧室中央通路の本箱に並んでいる事が解る。一見閉架式に見え乍ら，開架的要素も大いにある。地下のカード室のレファレンスも親切に択んであり，各種カードボックスも使い馴れて来ると実に便利である。司書や先生も物を尋ねれば親切に教えて呉れる。「求めよさらば与えられん」は「求めなければ与えられない」と訳す可きではないかと気付くには2年程掛ったことになる。そしてパリには実に多様な図書館図書室がある事が次第に解って来た。各区に区民図書館

がある事は勿論であるが，その他博物館，美術館を初め各種研究所に図書室があり，Bibliothèque Nationale は正にここにしかない本を見に行く所なのであった。我々外国の研究者は Bibliothèque Nationale のカードを楽に貰えるが，普通は12回券とか短期間の入館券しか貰えないようである。又，他方各所の小図書館が充実している。館員は人手が足りないと皆こぼしているが，日本とは比較にならない程，保管，管理に人手を使っている。Bibliothèque Nationale では対閲覧者サーヴィスは週4日を越えてはならず，一日は調査，研究に当てられていると云う。ここは印刷本部，雑誌部，写本部，版画地図部，東洋部に分れているが館員はそれぞれ専門家で情報の検索法を良く知っていて，又解らないことは即刻，同僚，上司に電話で尋ねる態度には其都度感心させられた。

Bibliothèque Nationale で印刷本部は朝開館と同時に入る位でないと席がとれない。しかも本も取り合いとなる事がある。R. Aigrain の *l'Hagiographie*（1953）は新らしい本だが入手困難で基本書であり，通って読んだが，たまたまもう一人読んでいる人がいた。その人が翌日も reserve していて中々読めない。ふと思い付いて Musée Pédagogique の図書室にいってカードを索くと架蔵されている。ここは館外貸出しをするのでゆっくり読んだことがある。写本はかち合えば司書に教えてもらい，照合位の仕事なら譲り合える。印刷本も普通のものは何箇所かの図書室を使う。

日本に戻ると流石に不便であるが，個々のモノグラフィはマイクロフィルム等も註文出来るので，時間と費用をかければ見られぬ事はない。一番不便なのは雑誌とレファレンスである。学生時代から Wagner の書誌に塾図書館の架蔵の有無をチェックしておいたのは本を買って来る時には大いに役立った。中世に関しては筆者の Bossuat の書誌に塾の配架番号を記入してあるので可成り便利になって来ている。困るのは専門誌の簡単に見られぬことである。Journal des Savants は1665年から現在まで続いている重要な雑誌だが，塾は勿論，揃っている所はない。東大に19世紀末があり京大にも一部分あるが，日本にこれが揃っていないのは不思議である。*Histoire littéraire de France* 42巻はパリ国立図書館では大閲覧室左手の本箱に並んでいるが東京では東大仏文研まで行かねば見られない。Zeitsch. f. r. Philologie は早稲田仏文研に行く必要があり中世写本について *Notices et Extraits des MSS.* は不可欠なものだがパリに行けば開架で見られても日本には無い。中世仏文学研究者が皆探しているのはフランス図書館写本カタログであるが，これは実際は各図書館ではカタログに書き込みがあり，現地に行かねばどうにもならないものである。せめてカタログ位はと思わずにはいられない。現地では時間が惜しく，ゆっくりカタログを読んではいられぬからである。筆者は留学後，古本のカタログで Paulin Paris の *Manuscrits de la Bibliothèque du Roi* 7 vols（1836—1848）をどうせ入手出来ぬと思い乍らも註文し，忘れた頃丁度正月に小包で受取り，しかも P. Paris の署名本で「夢かと思う」のはこのことかと感じたことがある。これは個々の写本を具体的に記述したもので，二回目の留学の時は，これを読んでいたことで大変得をした。2回目の留学は8年後のことであったが，流石にこの時は正に着いた翌日から国立図書館のカタログの部屋で，二日振りで戻ったかのように仕事が出来た。昔使ったレファレンスブックが場所も動かず同じ所にあり，場所を変えぬことが如何に有効であるかを実感した。この時は鷲見君が印刷本部の右側奥に始終来ていて昼に誘っては食事に出たりしたのも懐かしい想出である。鷲見君は既に留学3年目で図書館にも馴れていた。フランスでも使われるようになったコピーマシンの使い方を此方が習ったりした。1973年春には初めて版画地図部に入ったが，求める古版画を探すのに苦労し昔の留学時代の心細さを想い出した。図書館も古書店も始終通っていることが何より大事だと云うことを泌みじみ実感している。

ロー・ライブラリアンの必要

小林　節

私に限らず，職業としての研究にたずさわる者（あるいはそのための訓練を受けた者）は誰れであれ，程度の差こそあれ，各自の研究分野に関する内外の情報を収集する技術を身につけている。

私自身や身近な同僚の体験からみて，そうした技術は，各自が，長年図書館へ通っているうちに，多くの試行錯誤を経て修得したものである。もちろん，その過程にあって，専門的訓練を経た図書館職員や各分科学の専門家たる教師からの助言や，またライブラリアンではない各分科学の専門家の手になる文献検索のガイド・ブックなどもおおいに有益なものであった。

しかし，いかんせん，さように必要のおもむくままになされた非体系的な体験の中から修得した技術には，各人それぞれに意外な盲点がありがちなもので，時に，レファレンスの職員にきわめて初歩的な質問をしてしまい，あとで赤面することもある。と同時に，この点に関しては，どこに自分の盲点があるかが自分では分からないところが，きわめてやっかいで，危険でもある。

他方，塾の図書館学科の出身で情報センターの第一線で働く人々は，当然のことながら，情報の収集に関するきわめて正確な一般的知識と技術を身につけている。しかし，そうした人々にも，特殊な専門分野に少し立ち入った——例えば，法律の中の憲法の知識を前提的に必要とする——情報の処理の問題になると，時に，技術的な限界があるようである。そして，研究者のかかえている情報処理上の問題は基本的には後者である。

そこで，当然に提起されてくる問題が，ロー・ライブラリアン（law librarian）の必要の問題である。もちろん，これは，何も法律の分野に限られた問題ではなく，あらゆる分科学に共通に言えることであろうが，その分野に関する一般的知識（せめて学部卒業程度のもの）を修得したうえで，更に，体系的に情報処理の訓練を受けた専門家の存在は，塾の研究・教育水準の向上にきわめて有益なものとなろう。すなわち，各研究者が，これまでかなりの精力を割いて職人の手仕事のような方法で担ってきた情報収集作業から解放されることにより，情報の内容的な処理に精力を集中できるということは，研究成果の向上，ひいては教育水準の向上に，直接的につながるものであろう。

更に，そうしたライブラリアンが，当該学科に関する体系的な情報処理講義を開講することになれば，後進のためにもきわめて有益なことであろう。

現に，私の知る限りでも，例えば，東京大学法学部には助教授・司書担当というポストがあり，また，スタンフォード・ロー・スクールにはロー・ライブラリアン&プロフェサー・オブ・ローというポストがあり，それぞれ，現実にその職務を遂行している専門家がいる。

そこで，現代のように，情報が氾濫し，そのため，かえって一部の情報が情報の洪水の中に埋没しかねない，といった状況下にあって，塾の研究・教育水準を維持・向上させてゆくためには，さような情報処理専門家の養成と登用が急務なのではなかろうか。（法学部助手）

信頼性の高い書籍販売サービスの確立

――洋書流通の諸問題――

渋　川　雅　俊

◇はじめに

大学という研究と教育の場で，学術情報流通の一端を担う仕事と高等教育における教材提供の仕事をしていて，常に気にかかることの一つは，十分な資料を満足に収集しているかどうかということである。このことは，つまるところ，図書予算が十分であるかどうかということとかかわりをもつが，それ以外にも幾つかのことが関連している。

国内書と洋書では，その流通に関して問題の現われ方が多少違っているが，洋書に限ってあげれば，図書の価格の問題は最も重大であると考えられている。しかし，この他にも，洋書と出版情報の流通の問題や書店＝図書館関係の問題などが洋書の円滑で効率的な流通を阻害している。

＊　＊　＊

この論説では，洋書の入手に関して，現在三田情報センターや他の大学図書館が直面している諸々の問題をとりあげて論ずるが，洋書に限ったのは，次のような理由による。すなわち，現在日本では，年間約300億円の洋書が輸入されている。この額は，国内書の年間総売上約9,760億円から比べると極めてわずかであるが，輸入される洋書のほとんどは，学術研究書であり，学術雑誌である。そして，それらのほとんど全部が全国の大学図書館や大学教員・研究者によって購入されている。したがって，この問題は，出版物という形態のメディアによって伝達される学術情報流通の問題であるといえるわけで，大学図書館関係者や学者・研究者が注目すべきテーマであるからである。

◇価格に関する諸問題

洋書の価格についての諸問題の中で，まずとりあげなければならないものは，洋書の国内価格の決定における＜換算率＞の問題であろう。この問題については，主要各新聞[1]で報道されたように，現在公正取引委員会で調査中であるので，その判断が出されてから改めて論じたい。またこの問題については，既に KULIC 4号[2]でくわしくとりあげている。

次にあげなければならない問題は，図書の値上りと高額資料の増加であろう。これらの問題は，三田情報センター受入統計にもはっきりと現われている。

表1：学術書（洋書）の平均価格

年度＼類別	購入冊数	購入総額（円）	平均価格（円）
1971	6,941	23,207,825	3,343
1972	7,065	24,725,563	3,499
1973	7,098	24,019,596	3,383
1974	6,763	27,495,267	4,065
1975	6,246	29,505,144	4,722

表1は，三田情報センターが過去5年間に購入した図書のうち，1点購入価格が1万円未満の洋書の購入状況を示しているが，それによると通常価格の洋書は，5年間に41％の値上りがあった。

表2は，三田情報センターが1972年度から4年間に一括購入契約を結んだ外国雑誌の契約状況である。これによると，年々平均契約価格が値上りし，4年間に49％増となっている。

表2：学術雑誌（洋書）の平均価格

年度＼類別	契約タイトル数	契約金額（円）	平均契約価格（円）
1973	948	8,766,280	9,247
1974	1,093	10,089,636	9,832
1975	1,136	12,504,547	12,208
1976	1,241	17,147,690	13,817

（年度は雑誌の発行年を示す）

表3は，三田情報センターが過去5年間に購入した図書の1点当りの購入価格を金種別に分けて各年度の受入状況を示したものである。これによると，この5年間，各金種別ともに購入冊数にはそれ程大幅な増減はなかったが，購入総額は毎年確実に増加していることがわかる。このことは，高額資料購入の増加の傾向を示しているが，これは，高額資料の出版および販売に重点がおかれてきていることをあらわしているともいえよう。限られた図書予算の中から，高額資料購入の支出が増えれば，蔵書構成の発展にアンバランスな状態を招く恐れがある。

◇物流と情報流通の諸問題

洋書の流通には，資料そのものの流通，いわゆる“物流”の側面と出版情報流通の側面がある。資料収集は，最終的には，資料そのものの入手を目的としているが，その過程では，出版情報の入手，出版情報による選書が非常に多い。

物流の問題で最も重大なものは，雑誌の<欠号>の問題である。

表4は，三田情報センターの過去3年間の欠号状況を調べた結果である。これは，毎年1回以上欠号あるいは延着などのクレームのあったタイトルを事故タイトルとして数えたものだが，決して少なくない事故率を示している。もっとも，三田情報センターで年間約1万8千ある洋雑誌の総受入件数と比べると，その欠号件数は，極めて少ないといえるかもしれない。しかし，<欠号>の重大さは，事故率の高低ではなく，1冊の，あるいは，1号分の欠号が問題なのであり，この点を重視しなければならない。

表4：学術雑誌（洋書）のタイトル当り事故率

年度＼類別	調査タイトル数	クレーム・タイトル数	事故率（%）
1973	778	60	7.7
1974	1,024	89	8.7
1975	1,035	45	4.3

（年度は雑誌の発行年を示す）

この問題について，大手洋書専門店は，昨年9月に外国雑誌契約と納品のマニュアル[8]を発行し，欠号が発生する背景を説明している。それによると，多くの海外雑誌出版社が欠号クレイムに応じない方針をとっていること，さらに，契約・納品の特殊な形態（図1参照）から，注文データの連絡ミス，郵送上の事故および誤配，宛先の大学での誤配など欠号が生じ易い原因が多いことが述べられており，<欠号>を完全になくすことは困難であるとしている。この点に関しては，ユー

表3：高額資料（洋書）の購入状況

年度＼類別	1万円以上5万円未満		5万円以上10万円未満		10万円以上	
	購入冊数	購入総額（円）	購入冊数	購入総額（円）	購入冊数	購入総額（円）
1971	1,174	9,455,094	309	2,892,240	640	6,201,974
1972	1,479	10,290,087	367	3,348,476	297	4,572,062
1973	1,282	11,056,165	554	4,353,232	989	22,345,810
1974	1,113	13,705,002	412	4,312,689	877	12,017,704
1975	1,576	21,391,376	397	5,752,246	615	14,258,214

ザーと書店の間での考え方に大きな隔りがある。

雑誌の欠号と同じ様なことに全集や叢書などの欠巻欠冊の問題がある。これは，洋書専門店の受注および仕入関係の内部システムに原因があるが，これまでのところ抜本的な解決策がとられていない。

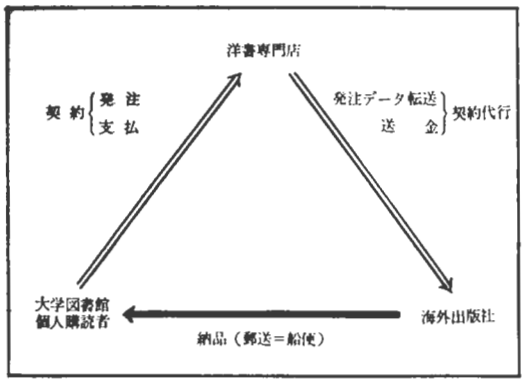


図1：学術雑誌（洋書）の発注・納品ルート

外国政府出版物や国際機関の出版物，あるいは，海外学協会出版物などのノントレードブックスが入手しにくくなっている状況も物流問題の一つであろう。この問題の背景には，これらの出版物が商業ベースにのりにくく，注文を請けても入手しにくいこと，単価の安い割には手間がかかるなどの理由で，書店がこのタイプの注文を好まないということがある。手間のかかる，利益の少ない資料の受注を避ける傾向は，逆に高額資料の売り込みに精励する結果となり，幅広い資料収集の立場からすれば好ましい状況ではない。

見計（みはからい）納品による委託販売洋書が質量ともに少なくなってきていることも，洋書入手の上での問題点の一つである。見計図書による選書の最大の利点は，洋書を手にとって内容を検討することができることである。しかし，現在の洋書専門店の経営危機的状況を考えると，これをさらに改善した形での充実した見計図書納品は今後も望めないだろう。そうなると，出版情報によって選書せざるを得なくなるが，この点についても別の問題がある。

出版・販売情報の量的な流通については，国内の洋書専門店や直接海外の書店や出版社からいろいろな形で十分に伝達されているといってよい。問題は，むしろ，十分過ぎるぐらいの量と流通方法の形態や形式の多さ，複雑さにある。毎日郵送されてくる新刊案内のアナウンスメント・カタログや広告ちらしなどのダイレクト・メールは，<出版情報洪水>あるいは<出版情報公害>をもたらしており，効果的な洋書入手を阻害する要因となっている。

◇書店＝図書館関係

洋書流通における書店＝図書館の関係は，書籍販売にとっても，図書館サービスにとっても大変重要な側面である。出版物の送り手と受け手という関係は長い間続いてきたが，最近では，出版物と出版情報の増加や出版物の形態・形式の増殖など流通対象の量的質的変化，あるいは，研究主題分野の拡大と専門化や学術情報資料源の世界的地理的拡散などの環境の変化などによって，新しい関係を確立する段階にさしかかっている。

書店＝図書館の間に新しい，好ましい関係を確立するためには，まず書店サイドがイニシァティブをとってユーザーが十分に信頼し得るサービスを提供することが必要である。現状を改善するために，書店は，まず第一に，学術情報流通の変化や新しい環境を背景にサービスオリエンテッドに経営方針および経営システムを確立する必要がある。第二は，書店のサービスに出版情報処理技術の導入を図ることが必要である。それらの専門的諸技術は，既に，図書館・情報サービスの分野で確立されており，洋書販売サービスにも十分活用できる。第三は，上記二点を背景にした洋書販売セールスマンシップの確立が必要である。セールスマンは，出版物や出版情報の送り手と受け手を結ぶ重要なリンクであり，今日では伝説化しているが，古きよき時代の大学教授＝書店番頭の緊密な関係を，新しい環境のもとで確立しなければならない。

このようなことは書店サイドの問題ではあるが，書店だけの努力に待っていては容易に実現しない。洋書販売のサービスが向上すれば，結局は

ユーザー側の利益に結びつくわけであるから，改善の努力には図書館サイドも進んで協力すべきであろう。

アメリカ図書館協会では，1961年に書店＝図書館関係委員会[4]を設置し，出版物と出版情報流通の諸々の問題の解決を図ってきた。その活動の成果は，まず，図書と雑誌の発注・受注および納品・支払などに関する書店＝図書館間の事務手続の標準化[5-6]となって現われた。1975年のアメリカ図書館協会総大会[7]では，出版社，書籍販売業者，図書館専門職による研究集会を行ない，出版物の流通，取引諸条件・諸手続，出版物のマーケティング，選書や発注のための出版情報の伝達方法などのテーマを討議した。この研究集会は，書店＝図書館関係委員会が企画したものであり，そのために長い時間をかけて基礎的な調査研究を行なった。

国内では，資料の入手に関する諸問題は，個々の図書館とその取引書店の間で協議され，解決が図られたり，調整されたりしている。三田情報センターでも，毎年取引諸条件や事務手続の確認[8]をしたり，資料の入手に関する諸々の問題を必要に応じて行なっている。しかし，それは，特殊な状況における特殊な解決にすぎず，根本的な改善が図られるまでの一時しのぎである場合が多い。

そのような問題意識がきっかけとなって，昨年12月，三田情報センターを含め８つの私立大学図書館の収書業務担当責任者と洋書専門店４社の営業担当部長が集まり，＜洋書流通問題懇談会＞[9]を発足させた。会の主旨は，洋書流通の諸々の問題を洗いだし，個々の問題を分析して，どこに本当の問題があるか，何が本当の問題かを確認して，それらの解決の方向を探りだすことである。懇談会は，図書館協会を背景にして組織されたものではない。したがって，アメリカ図書館協会の書店＝図書館関係委員会のように大がかりな活動はできないが，このような形での活動がきっかけとなって，もっと組織的に書店＝図書館協力体制を設け，根本的な問題解決が図られることが今一番必要とされている。

◇むすび

洋書流通の諸問題の中で最も重要で根本的なことは，信頼性の高い書籍販売サービスに基づいた書店＝図書館，あるいは，書店＝個人ユーザー（大学教員・研究者）関係を確立することであろう。しかし，このような関係は，出版物による学術情報の利用という観点からすれば，出版社＝書店，書店＝図書館，図書館＝利用者という３つの関係，あるいは，図２のような一連の関係に拡大

図２：学術書流通プロセス

しなければならない。そして，このプロセスにおいて，信頼性の高い学術情報の流通システムに基づくサービスを提供するためには，大学図書館が書店サイドに諸々の問題の解決を要求するのと同じように，大学図書館は，利用者からの，そのような要求に応じなければならないだろう。

〔追記〕 洋書カルテル問題について，公取委は，価格換算率の決定に際しカルテルの事実があったと認定し，８月３日，洋書輸入協会に対し，協定を破棄するよう勧告した。同協会は，今後に問題を残すとしながらも，この勧告に応諾する様子である。

（三田情報センター収書課長）

—— ◇ —— ◇ ——

1）1976年２月13日付，朝日新聞，毎日新聞，読売新聞などの朝刊にて報道，この件については，６月10日公正取引委員会審査部第三審査係官が三田情報センターに調査に来た。

2）「洋書は安くなる!?＝円切上げと洋書価格問題の推移＝」渋川雅俊　**KULIC** 4, 1972, p. 21—24

3）「外国雑誌の特殊性について」紀伊国屋書店　昭和50年９月　11p.

「外国雑誌の手引」丸善株式会社　昭和50年　14p.

4）Committee on Book Dealer-Library Relations は，American Library Association の Library

Resources and Technical Services Division の中に設置されている。
5) "Guidelines for handling library orders for imprint monographic publications" in S. Ford. The Acquisition of library materials. American Library Association, 1973. p. 207—223.
6) "Guidelines for handling library orders for serials and periodicals." American Library Association Book-dealer-Library Relations Committee. 1973. 16p.
7) "Book marketing and selection: A publishing / library forum," **Library Resources & Technical Services**, v. 20, 1976, p. 65—69.
8) 「三田情報センター図書資料発注・購入要項（取引マニュアル）」三田情報センター収書課，1975（隔年刊）
9) 洋書流通問題懇談会の参加メンバーは，中央大学図書館加藤元三，法政大学図書館増田稔，慶應義塾大学三田情報センター渋川雅俊，明治大学図書館川田雅一，立教大学図書館多田二郎，拓殖大学図書館池田哲朗，東京電機大学図書館三沢孝次，早稲田大学図書館植田覚，紀伊国屋書店吉本明城，国際書房石川英吾，極東書店川辺功，丸善石田宗弘の諸氏，合計12人である。

トピックス

除幕式を終えた藤山雷太胸像の由来

写真は，旧藤山工業図書館の創設者，故藤山雷太氏の胸像である。同館の後身である藤山記念日吉図書館の館長室に置かれていたのを，最近の館内改修を機会に，その本来あるべきところに移すこととなった。その後，工事も渉って去る（1976）5月26日，藤山愛一郎氏を主賓に迎え，除幕式を終えた。

銅像の台座にある銘を読むと，

「……将来一般ノ工業界ヲ裨益スル所アラント欲シ，工業図書館建設ノ計画ヲ樹テ，隣接ノ高台ヲ相シタルハ大正四年，……（中略）……然ルニ欧州戦乱ノ為メ建築遅延漸ク工成リシ時，大正ノ大震災ノ為メ全壊ノ不幸ヲ被リ直ニ再建築ニ着手シ，遂ニ昭和二年落成スルニ至レリ」とあって，更に「今ヤ支那事変ニ伴ヒ，将来ワガ産業ノ発展ハ期シテ待ツ可ク，本館ノ使命愈重キハ予ノ甚ダ本懐トスル所ナリ，偶増築竣工ニ際シ一言ソノ由来ヲ記スルコト斯ノ如シ　昭和十三年臘月　従三位勲三等貴族院議員　藤山雷太」で終っている。

この年，雷太氏は没し，嗣子藤山愛一郎氏が同館を継承し，昭和19年には，「慶應義塾藤山工業図書館」として，本塾に寄付されている。昭和33年，工学部の小金井移転に因る利用者減少に伴い，同館は閉鎖され，その売却金を以って，新たに日吉地区に建設されたのが，現在の「藤山記念日吉図書館」である。

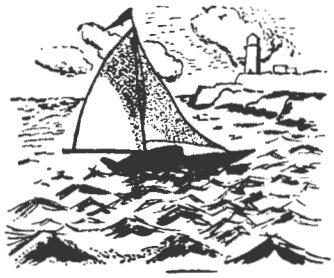
銅像は，昭和十三年以来，激動の昭和史を生きて，いま深緑のキャンパスを静かに眺めている。図書館に通う若い塾生が，足を留め，台座の文字に読み入って，暫し雷太像と声に出さぬ短い対話を試みる風景が，垣間見られる今日である。

ニューヨーク大学図書館

佐藤　孝

昨年秋約1ケ月間ニューヨークに滞在したが，その間度々利用したのが私立ニューヨーク大学（NYU）の図書館であったので，その時の印象深かった事柄について記したい。

グリニッジ・ビレッジに接し，ワシントン広場はキャンパスの一部という感じのNYU迄は私の宿泊したホテルから徒歩15分程のところであった。ニューヨークに着き最初にNYUを訪問した時，図書館の利用を申し出たのであるが「あなたの研究に役立つ資料はダウンタウンのビジネス・スクールにあるのでそちらの方がよいでしょう」と許可が得られなかった。私は私立大学の財務関係の調査・研究の目的で渡米したものの，実際はそうた易く短期間にその成果をあげる事が出来るものとは考えていなかったし，ある程度アメリカの教育事情を理解できればよいと思っていたので，単純に図書館の利用を申し出たのである。私の意志は旨く伝わらなかったようである。先方は親切心から専門分野の図書館を紹介したものと思う。尚ここで十分である旨話をしたが，あく迄その成果を心配してくれるのだった。翌日友人（NYUビジネス・スクールで勉学中）に話してもらい，入館許可証を発行してもらったのである。



NYUの図書館は1973年総工費約75億円を費やして完成した地上12階，地下2階の大図書館である。外観は薄いあづき色，内部は日本的な感じのする明るい色彩である。収容人員約5千人，蔵書数120万冊を有する。カタログ・ルームは広いスペースで整然としており，初めての利用者でも不便を感じない。図書の利用は全てオープン・シェルフ方式であり，閲覧机は騒音を和らげるように広過ぎる程の立体空間を有する設計である。コピーは1枚10セントのセルフサービスであった。

予定の無い日は殆んどこの図書館を利用したが，その事によってニューヨークでの生活は私なりに満足できたと思う。主な利用場所は1階のレファレンス・ルームと10階の教育関係資料室である。館員が心配してくれた私立大学の経営関係資料は私にとっては十分過ぎる程の量であった。殆んどの分野に亘って数多くの収書がなされていたが，そのことによってアメリカに於ける私学経営の歴史をうかがい知ることが出来ると思う。しかし高等教育の現状（1973～75）を知る資料は比較的乏しく，全く整理されていない面もあった。

カタログ室に居る時様々な質問に遇ったこと，子供と一緒に読書する婦人や，地下のスナックや学生ホールで軽食をしながら談笑する男女学生，夜10時も過ぎる頃の真剣な学生達の姿等，それぞれが印象的であった。週休3日制とはいえ毎日開館しており，閉館時間は午前零時の曜日もあった。入・退館する学生は殆んど切れ目がない程であった。

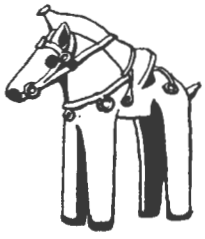
刺激的な大都市ニューヨークの真只中に位置するNYUはコロンビア大学と共通した社会環境にある。NYU図書館の名称はLibrary and Study Centerである。その状態を総じて言えば余りにも多くの浪費と無駄が感じられる整い過ぎた条件にあり，キャンパス外との異和感の印象が強い。好ましからざるNYUの立地条件の故に，一般社会との距離への絶えざる意識と努力を要するであろう関係者の苦悩を理解できるような気がする。

1973年，約3千名の学生を有するNYU工学部が財政難のため市当局に買収を余儀なくされたが，Library and Study Center は将に同年完成したのだった。それはある意味ではNYUの宿命的な方向を示唆したと言えるものであり，興味深く且つ印象的であったと思う。

（経理部長付）

洋書取次業に従事して

岡本正三
（北尾書籍貿易株式会社）



私は，洋書取次店「北尾書籍」の米国駐在員としてニューヨークに5年近く滞在し，その仕入業務に従事してまいりました。

話を，皆様になじみの深い学術専門図書にしぼって書いてみます。そもそも「本」という商品は，出版元の独占製品であり，しかも日本の「日販」「東販」に相当する大取次業者が，米国にはないので，仕入業務は即ち出版元（時には販売代理業者）に対しての直接発注行為ということになります。

米国の大きな出版社，例えば McGraw-Hill とか Prentice-Hall とか，皆様よくご存知のところもありますが，出版元，要するに何らかの形で本を出しているところは，学会・協会・大学出版局・調査研究機関・複製業者等すべてを含めますと（新聞社・雑誌社・同人誌を出している団体は除き）米国には約7,300ものパブリッシャーがあり，そこから年間約39,400点もの本が出ています（R. R. Bowker 社の1975年の資料による）。その他に，政府出版局（Government Printing Office，以下 GPO という）から年間約19,300点（非売品を含む）が出されており，また，えたいの知れない（？）ところから出ている特殊レポートみたいなものを加えますと，これはもう，実数がつかめなくなってきます。

当社のように，図書だけでなく，あらゆる形態の出版物を取扱っている会社では，耳なれない出版物の引合いも多く，実際には，殆どのものは，日本から直接エヤメールで出版元へ発注しますが，特殊なもの，日本からの発注に対して返事のないもの等については，現地ニューヨーク事務所で仕入れをいたします。

◇第一話　協会出版物

日本から，或る協会へ発注したところ，音さたがないので，ニューヨーク事務所へ仕入れ指示票（オーダーフォーム）がまわってきました。その協会は，手元にあるダイレクトリーで，フロリダ州の小都市にあることがわかっていました。しかし，その協会からは出版物を仕入れたこともなく，協会に関する資料も手元にはありませんでした。電話で，その協会のパブリケーション・デパートメントの人を呼び出したところ，そこは，出版物担当の専任者もなく，事務所の代表者のような人が，相手に出ました。曰く――「その出版物はたしかにあることはあるが，会員でなければダメだ」という。「もちろん，日本人でも会員になれるから，「その方」（当方からいえば顧客）も会員になるよう，入会願書と協会についてのブロシュアを送る」という。大局的にみれば，メンバーになった方が「その方」の利益につながるかもわかりませんが，この際はとにかく，その出版物を入手するのが目的ですので，ムリヤリたのんで送ってもらうことにしました。この場合は，幸い，「あと払い（現品に請求書をつけて送ってもらい，あとから払うこと）」でよかったのですが，本代の他に送料（至急送れと指示したので）も込められて請求されてきました。

なじみのない出版元と取引する場合は，予想外の手間とコストがかかります。

◇第二話　急ぎの注文

非常に急ぎの注文だという。日本から「航空便で送れ」の指示をしても，必ずしも指示どおり送られてくるとは限らないし，航空便は高くつきます。そこで，ニューヨークで仕入れて，航空貨物（エヤカーゴまたはエヤー・フレイトという）で送れという。その方が確実で安くつくという訳です。

出版社はニューヨーク市内にあります。しかし，そこは事務所だけで，現品は郊外（約30km離れている）にあることは，常に取引のあるところなので，よくわかっています。例によっていつもの係の人を電話で呼び出しました。ここには，当社の口座がありますから，請求はあと払いになります。口座番号を言って，確認します。「急ぐので速達で送ってくれ」の指示を忘れないようにしました。念を押します。そうでないと，社内処理に数日かかり，郵送方法は普通の書籍小包（Special 4th Class Rate）になり，わずかの距離でも1週間はかかります。この辺は日本と同じです。本代は書店割引されますが，送料は，当方負担となります。実際に車で取りに行った場合の人件費・車輌費を考えますと，その送料は非常に安いものですが……。急ぐ注文は，このように個々に対応して注意深く処理しなければなりません。

◇第三話　政府出版物

さきにも述べましたが，年間2万ちかい出版物が出ています。しかし公けに売り出されているものは半数ぐらいと思われます。入手の方法は二つあり，一つは全米19都市23カ所のGPOブックストアで買う方法と，もう一つは首都ワシントンのGPOに発注する方法です。

しかし，例えばニューヨーク市のGPOブックストアは50坪ぐらいの広さがありますが，置いてあるものは，極めてポピュラーなもの（食品添加物についての消費者向けのやさしい解説書など），一般的なもの（法規など），主要定期刊行物（官報など），報告書（多国籍企業小委員会レポートなど）だけで，日本から入手の要求のあるようなものは，ほとんど見当りません。

したがってGPOへ直接発注しないと入手できないことになります。発注する際には，必ずClassification Number（商品番号に相当する）というものがいることになっています。ぼう大な在庫のなかから，特定のものをみつけるには，どうしてもこのナンバーが必要なのでしょう。しかし私の見るところ，このナンバーのつけ方がスッキリしてない上に手作業で処理されていますので，日本からGPOへ直接発注した場合，入荷までに半年から1年もかかってしまうことが多いです。

その上，発行直後のものでも「品切入手不可」の返事も多く，一体GPOはどうなってるんだと，疑ってみたくもなります。ところが改めて発注してみると，こんどは「入手可」であったりして，まったく奇々怪々です。

例えば，日本にも影響力のある医薬品・食品関係の法規集は，毎年5分冊にわかれて改訂版が出るのですが，これが全冊そろわなくて，いつも問題になるのです。例えば「パート4」だけが品切で入手不可というように，考えられない事故が起るのです。

中には，発注しても全々反応のないものがあります。「ややこしい本の注文書や未処理でたまった注文書など，クズかごに棄てられている」とのウワサがあり，真偽のほどはわかりませんが，そう思わざるを得ないこともあります。

現地で，すべての要件を充たした完全な注文をしても，入荷までに1～1.5カ月かかります。

◇第四話　書誌データが不明確な場合

これは説明するまでもないことですが，書誌的データ（書名や著者名や出版社名）があいまいですと，仕入れができないのは当然です。これが意外と多い。

こんなことがありました。「著者名A，書名B，出版社名C University Press という本」の仕入れ指示票がニューヨークにまわってきました。C University Press へ問い合わせてみると，そのような本は出してないという。もしかしたら，C大学の先生の書いた論文かもわからないと思い，同大学の図書館に問い合わせてみると，それは図書

館に蔵書としてあるという。そこで出版社名を聞くと，「D出版社」という。

なんのことはない。著者AはC大学の先生だったので，出版社名がC University Press となったらしい。最初からD出版社と指定されておれば，このような混乱はなかったハズです。あやしいもの（直感でわかる）は最初から疑ってかかって「Books in Print」等の商売道具で確認をとるのですが，中にはこのように，ついまどわされるものがあります。

*　*　*

日本の本でも，書店から「取次店」経由で本をとりよせるのに3～4週間かかります。あげくの果てに品切等の返事が忘れたころに返ってくる……など，流通に時間がかかっておりますし，一方「取次店」を通さない出版物も増えてきております。米国の場合は，その取次店がありませんから，取引条件は個々の出版社によって異なり，とくに発注・支払事務が繁雑となります。取次店がないと，中間マージンをとられませんから，それだけ流通は単純ですが，必ずしも利点ばかりではありません。かといって，日本のような「取次」経由で時間がかかるというシステムも，スピード時代の要求に応えうるものではありません。

根本的には，パブリッシャー側の高姿勢が改まらない限り，流通問題は「早い」「確実な」システムに改善されません。なぜなら，パブリッシャーでの内部処理に時間がかかったり，あいまいな処理では，いくら物流そのものを改良しても，その部分が，取り除き得ない障害となるからです。

＜情報センターの機械化システム＞

情報センターは，1970年の創設と同時に，業務処理の能率化と近代化を推進するため，機械化計画を立て，プロジェクト・チームを編成して，要員の養成ならびにシステムの開発・運用に当らせている。1973年まではＩＢＭから貸与されていた7040/1401という電算機を使用していたが，74年以降は塾が導入したＵＮＩＶＡＣ1106を使用している。プログラム言語はコボルを主体としている。

情報センターの機械化システムは本誌と同じくＫＵＬＩＣという名称を用いており，現在次のようなサブ・システムによって構成されている。

1. **BICC**（Budget Information Control on Computer）　科目の多い複雑な図書予算の支出と支払事務を管理するシステムであり，まず三田で実施し，ついで日吉においても実施しているものである。
2. **PICC**（Periodical Information Control on Computer）　逐次刊行物を管理するシステムであり，現在は逐次刊行物（継続受入中）の全塾総合目録の作成を主体としており，本部事務室が担当している。
3. **AICC**（Acquisition Information Control on Computer）　図書発注・受入を管理するシステムで，欠落の生じやすい継続出版物の管理を中心としており，三田で稼動している。
4. **CICC**（Circulation Information Control on Computer）　図書の館外貸出・館内閲覧などの利用統計を処理するシステムであり，三田において実施されている。
5. **MICC**（MARC-II Information Control on Computer）　米国議会図書館が作成・頒布する MARC-II テープを利用し，英仏語新刊書の目録カードや各種の書誌を作成するシステムで，すでに実験の段階は終ったが，経済性などの理由から現時点ではまだ稼動していない。

おいしいケーキのはなし

清　水　和　夫

おいしいケーキはウインドーにかざっておくだけでは物足りない。やはり食べてみなければ，その本当の味はわからないだろう。図書館は利用者がいて初めてその機能が生きてくるもので，それが，連日満員の盛況でしかも利用者が満足のいくサービスを受けられる所でありたいと思う。正常な機能を果たす図書館，ここでは特に藤山記念日吉図書館の学生利用促進について昨今の状況などを綴ってみたい。

本年4月7日多年の願望であった全面開架式による利用システムの改善計画が漸く実施の運びとなった。しかし，その経緯は新幹線がレールの上を走るようなわけにはいかなかった。

この図書館は建物の構造が非常に複雑である。開架式の導入に先立って利用者の誘導通路を確保し，照明を増強する等の館内改造が必要であった。また，導入によって予想される作業の質や量の変化と職員の処理能力との関係も見極めておかねばならなかった。導入には難問が山積していたのである。

赴任から半年間，館員の一人としてこの計画の実施に参加したことはたいへん有意義であったし，仕事に対する充実感を味わうことができた。館員一同が一致協力して計画の成就に向かって会議を重ね，問題を分析するというプロセスを通じて，改善のためのマニュアルが作成され，それに基づいて作業が進められたのである。

思うに，私達の日常生活は「意志の決定」とそれに基づく「実施・評価」という一連のサイクルによって支えられている。従って，活動およびその成果を期待するためには「計画の設定・実施・評価」を適切かつ合理的に行うことが必要である。

社会の進歩に伴って複雑化する諸条件を認識し，これに対応した活動を行うためには「計画の設定・実施」の段階で常に幅広い情報を集め分析して計画の合理性を判断しなければならない。当図書館は利用促進のために閲覧システムの改善を図り合理的な手続きで利用を可能ならしめた。これによって三田の図書館との貸出手続きの標準化が実現したわけだ。この標準化は日吉の学生が将来専門課程に進み文献探索を試みる際のトレーニングの場の提供を意味する。一石二鳥の成果を得たといえるだろう。

また日吉情報センターはサービスの対象を学部学生に限定せず，広くキャンパス全体の構成員に開放して利用を促進している。今回の改善はその主旨実現のための基本的なステップである。利用の促進を図るため学生に対するＰＲの場をガイダンスに求め，各学部および教務部日吉支部の協力を得てこれを実施した。この試みは図書館の利用率を高める上で重要な役割を演じたことを標準統計が示している。因みに7月4日の館外図書貸出数をみると294冊，202人という数字が記録されている。当図書館としては画期的な記録である。どなたが書いたのか日報統計用紙の備考欄に“本日の館外貸出目標数200冊，150人突破”とあった。当然大入袋，テーブルにはおいしいケーキが並んだかは読者のご推察におまかせしょう。

（日吉情報センターＰ．Ｓ．課）

企業体研究者の情報利用の実態と大学図書館への期待

高　山　正　也
（東京芝浦電気株式会社）

1.　はじめに

現在，主要電気機器メーカの技術情報担当部門の間で，企業内研究者・技術者の情報ニーズ，並びに情報利用実態を調査しており，今年中にもその結果がまとまるとみられるが，明らかになったその一端を以下に紹介し，あわせて，それをもとに企業体専門図書館情報管理部門のもつ大学図書館への期待にも一部言及してみたい。

2.　企業体研究者・技術者の情報利用実態

企業体の研究者・技術者の情報利用実態については既に科学技術庁や工業技術院をはじめとして種々調査されており，今更という感が無くもない。しかし今回の調査の主眼は既存調査よりも更に綿密な調査を行うことであり，その一例として，従来の調査が情報利用者の文献利用実態を明らかにしていたのに対し，今回の調査は非文献（非資料）の情報伝達（例えば会話や講演等）をも対象にしたことなどである。

調査の概要，方法等は別途発表の機会もあると思われるので，本稿では割愛し，調査結果の一端を示すにとどめる。

(1)　企業体研究者・技術者は何を読んでいるか。（表1参照）

表1の如く，資料類の中では雑誌・新聞等のニュース記事や論文を読む場合が多く，社内外の技術報告書類がそれに次ぐ。ここで注意すべきは非公開資料で自社資料，社外資料ともに，公開資料と異なり特定の資料が集中的に使われるということである。

<表1>　利用する資料

区分			資料の種類	利用頻度順位
資料	公開資料		ニュース記事をのせた雑誌・新聞	1
			雑誌論文	2
			テクニカル・レポート	3
			統計資料	4
			政府刊行物・白書類	5
			レター（速報）	6
			試験・実験・観察報告	7
			単行本	8
			特許関係一次資料	9
			レビュー記事	10
			特許関係二次資料	11
			抄録誌	12
			ハンドブック・データ集	13
			索引誌	14
			人名録	15
			ディレクトリー	16
			その他	17
	非公開資料	自社資料	技術レポート	1
			研究提案書・プロポーザル	2
			自社製各種二次資料	3
			カタログ	4
			取扱説明書	5
			仕様書・図面	6
			設計資料	7
			その他	8
		社外資料	工業会資料	1
			他社カタログ	2
			個別調査資料	3
			シンクタンク・レポート	4
			他社取扱説明書	5
非資料			オーラル・コミュニケーション	1
			社外の会合	2
			社内の会合	3
			企業の情報部門に一任	4
			企業外情報部門に聞く	5

現在の企業体図書館では公開資料だけでなく自社発行資料も含めて非公開資料が大きな比重を占めていることがわかる。

(2) 企業体研究者・技術者はどこで情報を入手するか。(表2参照)

今日のように情報量が増加し，その流通経路が多様化すると利用者も情報を単一の窓口からの入手だけですまされなくなる。そこで社外からの情報入手を調べた結果が表2である。

その結果，意外に多いのは民間の他企業で，これに経済団体・工業会等が続き，さらに国会図書館や公共図書館が続いている。大学図書館も第5位で，これは国立大学をはじめ，慶應義塾以外の多くの大学が学外者の利用を実際上拒んでいる現状を考えると，利用者の大学図書館への期待の大きさがうかがえる。

(3) 企業体研究者・技術者は何についての情報を求めているか。(表3参照)

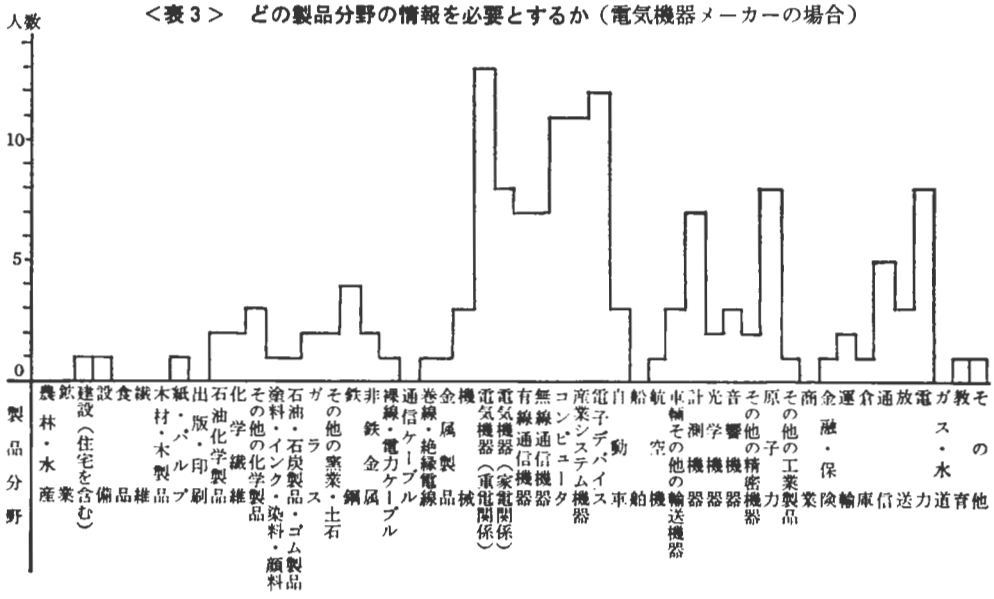
電気機器製造業における研究者技術者が何についての情報を求めているかと言えば，言うまでもなく，電気機器についての情報であると考えられるが，実際には表に示す如く，

＜表2＞ 情報を入手する場所

区分	機関名	利用頻度の順位
情報(資料)機関	日本科学技術情報センター(JICST)	15
	国立国会図書館・公共図書館	2
	特許情報センター	10
	発明協会・特許データセンター	6
	国内情報(調査)会社	7
	外国情報(調査)会社	8
	その他	4
その他の機関	技術又は資本提携先企業	14
	機械設備購入先メーカー	16
	原材料購入先メーカー	13
	製品納入先メーカー	18
	商社	8
	その他民間企業	1
	大学・大学図書館	5
	学術団体	12
	経済団体・工業会等	2
	官公庁	17
	国公立試験・研究所	14
	その他	10

その関心のある情報分野は極めて多分野にまたがっており，殆ど全産業分野におよぶといっても過言ではない。これは情報のもつ特性でもあり，利用者の当面する表面的なごく一

＜表3＞ どの製品分野の情報を必要とするか(電気機器メーカーの場合)



部の範疇の資料だけでは決して充分な情報サービスはできないことを示している。

(4) 企業体研究者技術者はどのようにして資料にアプローチしているか。(表4参照)

表4に見る如く，最も多いのは図書室の書架へ直接行って見るという最も素朴で初歩的な方法であり，これに日常業務上の資料の授受・回覧等を通じて資料を発見する場合が次いでいる。さらに論文の引用文献・参考文献，リストの利用，索引誌・抄録誌の利用と続いている。一方，図書室の目録を利用して資料を探し出したり，図書館員に文献を紹介されたりする例はまれで，図書館利用技術の低さを物語っており，ベテラン図書館員の言う「最近の研究者・技術者は図書館の使い方を知らない。」という感想を裏づけている。

<表4> 資料を見つける場所・方法

場所・方法	利用頻度の順位
業務上の資料授受・回覧等を通じて	2
ブラウジング・スクリーニングによって	9
目にとめた文献の参考文献リストから	3
索引誌・抄録誌等の二次資料を使って	4
S.D.I. 等の情報サービスを通じて	7
図書室の目録カードを見て	5
図書室の書架へ直接行ってみる	1
図書室職員に紹介されて	7
外部情報機関の利用を経て	8
その他	6

3. 企業体図書館の対応と限界

以上にその一端をみたように，利用者の情報利用の実態は資料だけに限定してみても，主題領域についても，利用する情報資料の種類についても極めて広範囲に広がり，多様化している。これに対してサービスを提供する側の図書館は，その館種の如何を問わず，不満足な資源（特に労働力と資料購入予算）の投入しか得られず，苦しんでいる。特に企業体専門図書館は，いわゆる間接部門に位置づけられ，絶えず合理化対象とされる一方，経営環境悪化時の影響を最も強く受ける例が多い。これは営利基準で全てが動く営利企業体において，価値測定の困難な情報サービス部門の宿命であるといえよう。

これに対し，従来は各図書館毎のさまざまな工夫の他に，主に近隣地区所在の図書館の相互協力等の方法でシビアな事態に対処してきたが，主として次に掲げる蔵書とサービスの二面から少数の企業体専門図書館相互の協力だけでは充分に利用者の要求に応えられなくなりつつある。

(1) 蔵書構成の変化

① 非公開資料の重要性の増大

企業体専門図書館の特性として，従来より一般公開資料としての図書や雑誌類の他に，非公開資料として社内作成資料類を蔵書の一部に含む図書館もあったが，昨今，前述の如くこれに加えて，工業会資料，各種調査会社報告書等の需要が増大している。

これらの資料は非公開資料（頒布先が限定）とはいえ，購入を要するため，多くの企業体専門図書館では図書購入予算の中の少なからざる割合をこれら資料のために割いており，このような社外発行非公開資料（社外秘資料ではない）が蔵書全体の中で徐々に図書・雑誌等の一般公開資料を圧迫している場合もある。

② 学術資料と実務資料の乖離

企業体専門図書館で利用される資料として，新聞や一般雑誌，工業会資料等の非学術文献，即ち実務資料の比重が高まっている。これは企業内における研究・技術活動が単なる学術研究ではなく，営利活動の一翼を担った新製品開発活動とみられ，対市場，対競合企業等の種々の行動が付随することの必然的な結果と考えられる。その結果，蔵書を構成する資料群の中に前述の資料の配布の公開性基準による公開資料と非公開資料との区分とは別に，学術資料，非学術資料の区分が顕著になりつつある。ここで言う実務資料のうち，新聞や一般雑誌等を除けばその多くが社外発行の非公開資料に区分される。この実務資料のもつ比重

は企業体専門図書館では相当に大きく，またその需要も極めて大きい。

今後，企業体専門図書館の蔵書面での特徴をなすものはこの実務資料の集積であると言っても過言でないと同時に，またそうなってこそ企業体専門図書館が大学図書館の亜流でなくなり，大学図書館との相互協力も双方に有効なものとなる素地が形成される。

ただ，これら実務資料は学術資料と異なり，情報価値のライフサイクルが短かいものが多く，実務資料が増加すれば早晩，蔵書管理上の新たな問題を惹起しよう。

(2) 情報サービス：資料提供から情報提供へ

企業体専門図書館等のいわゆる情報管理部門が社内で期待されているサービスについては，従来の研究活動，技術活動の補助部門としての資料提供サービスから，研究活動・技術活動と情報活動の分離を前提とした情報提供サービスへという変化がみられる。

これは従来の情報管理部門が資料提供を主に行ない，研究者・技術者が研究活動・技術活動という本務のかたわら資料を読み，資料のもつ情報をデータとして自らの欲する情報へと知的集約度を高める情報活動をも兼行するという体制から，研究者・技術者をできるだけ本務に専念させ，情報活動の負担から解放させようとする方向に向かうものである。

その結果，資料のもつ情報をデータとして用い，研究者・技術者から依頼されたテーマのもとで，それらデータを処理・加工し，情報として提供することを企業体専門図書館をはじめとする情報管理部門が期待されはじめている。

ただし，このような情報提供サービスを行うには，その基礎に有効な資料管理活動の存在することが前提となっていることは言うまでもない。情報提供サービスが重視されるからといって資料管理機能を企業体専門図書館が放棄するものでもない。実際は逆に，情報提供サービスが重視されればされるほど資料管理活動が要請される。問題は企業体専門図書館が資料提供主体のサービスから情報提供主体のサービスへの過渡期をどうのりきるかである。

4. 大学図書館への期待

以上のような環境の中にある企業体専門図書館が自らの努力で事態を改善させるための努力を払うことは当然として，一方では大学図書館に対して次のような期待をもっている。しかし不幸にも筆者は大学図書館についての経験も知識も無いため，以下に述べる事項が適切であるか否かは判定できないが，その一端でも今後の大学図書館の活動の中にとり入れられれば幸いである。

(1) 大学図書館と専門図書館の相互協力

従来からも大学図書館と企業体専門図書館との相互協力が無いわけではなかった。かなり活発に行われている事例もあると聞くし，慶應義塾の情報センターもその一つであろう。しかし多くの場合は相互協力とは名ばかりで，どちらかと言えば企業側が一方的に大学図書館を使わせていただいたものであり，真に相互がそれぞれの特徴を生かして資料面やサービス面で協力し合ったというわけではなさそうである。

また大学図書館側から見れば，企業体専門図書館に期待するものは何もないというのが実情であったかもしれない。しかし先に述べたように，この状況は今後大きく変化すると考えられる。一例を挙げれば各種工業会資料や官庁資料等専門図書館の収書の中心をなす資料が大学における研究・教育活動の中で価値をもつ場合も多いはずである。

このように大学図書館，専門図書館の枠をこえて，図書館の社会的分業を実現するための相互協力を行いうる環境がようやく整備される方向に向かっていることは事実である。

(2) 図書館利用技術の普及・教育

次に教育機関としての大学を構成する大学図書館に多くの専門図書館員が期待している問題がある。

先に述べた如く，昨今の学卒新入研究員や技術者の図書館利用技術は一般に低下していると言われる。慶應義塾卒業生はその例外であるとは思うが，大学在学中にせめて図書館を有効に使いこなし，基本的な二次資料類についての一応の基礎知識程度は身につけてもらいたいというのが専門図書館関係者の一致した意見である。

巨大化した大学の中で，また種々の制約の下で，困難とは思われるが，事態打開の糸口でも見つけられればと考える。

(3) 非資料（非文献）の取扱い方の研究

次に研究機関としての大学を構成する大学図書館，また企業体専門図書館に比較して全ての面で若干の余裕が感じられる大学図書館に対して二つの期待がある。

その一つは利用者の情報利用が多様化，高度化するにつれて，もはや従来の文献形態での情報伝達媒体だけを対象としていては情報管理部門としての機能を充分に果たせなくなっている。M. T. をはじめ，視聴覚資料，電波メディア等を如何に有効に図書館へとり込むか，大学図書館での研究に期待したい。

(4) 情報の知的集約度を高める技術の研究

残る一つの期待は情報の処理・加工の技術である。企業体専門図書館では前述のように，早晩，資料提供から情報提供に重点が移行しよう（この場合図書館の名称が変ることもあるだろう）。その時に備えて，情報の知的集約度を高める（情報の処理・加工）技術の開発・習得が要請されている。

大学図書館で情報提供サービスが近い将来可能かどうかは別として，大学図書館でもそのための技術を開発されることを期待する。

5. おわりに

以上に述べた中で大学図書館への期待としては適切な提言はできなかったかもしれないが，要は従来比較的交流の少なかった大学図書館と専門図書館との垣根を取り除きたいということである。

相互にさまざまな努力が重ねられ，その成果をあげている以上，それらを相互に交流させないという法はない。

そしてそのような地道な下からの盛り上がりがあれば，やがて上は図書館行政の問題から下は個々の図書室の管理・運営の問題点に至るまでの諸々の解決の糸口がつかめるであろうことを期待し，確信するものである。

図書館の女性職員

図書館は女性に適した職場であると云われ，現に多くの女性が働いている。実際にどれくらいの女性が図書館で働いているのか，またその比率はどれ程なのか，よくわからないが，手許にあるデータによると，公共図書館では，約5,160人の職員のうち1,730人が女性であり（昭和43年の調査），大学図書館では，約7,650人のうち，4,150人が女性である（昭和47年の調査）。いずれも古いデータなのでこの比率はもう少し多くなっているものと思われる。“ライブラリアン”は，このようにかなり＜女性化＞（Feminization）した職業と云えるが，＜女性化＞は，単に数値だけでなく，図書館の専門的業務における女性職員の役割が重要視されるようになったことをも意味している。

図書館はサービスの向上発展に十分な人的資源を保有していない。従って専門教育を受けた多くの女性の就業を期待しているが，反面女性職員の就業の動機や態度に問題がないわけではない。例えば，結婚までの実社会経験といった動機で就業するために在職期間が短かくなり，図書館業務のポジションの回転率を高くして，サービスの発展を阻害するというマイナスの要因をもっている。

こうした背景から，情報センターのスタッフを中心にして標記課題を研究するプロジェクトチームができ，慶應義塾学事振興資金（60万円）を得て，この6月から活動が開始された。このプロジェクトの研究は，諸々の調査技法によって全国の図書館に働く女性職員の①役割分析，②就業意識の調査，③専門職志向意識の把握を目標としている。

三田情報センターの特殊コレクションについて

石　川　博　道

三田情報センターが管理運営する図書館・研究室の蔵書中には多くの文庫名を付した特殊コレクションがある。それらのコレクションは慶應義塾に縁由のある学者文人実業家その他有識者蔵書家より寄贈，寄託（後に寄贈），購入その他図書購入基金の寄付といったケースをも含め，収集架蔵されたもので，今日の慶應義塾の研究教育の発展充実に極めて大きな寄与をもたらしている。そしてそれらは旧所蔵者の研究主題学問的業績乃至趣味を反映すると思われ，又その人の蒐集の労苦も想察できて，文化を伝持する図書資料本来の貴重な使命を人間とのつながりの裡に見出すことができて興味深い。この文化荷担者としての功績を永久に記念する意図の下に文庫として個人姓を冠する訳であるが，そのコレクションの取扱いには利用に関連して問題がないわけではない。即ちコレクションの規模・数量・内容の質・受入事情がどうあろうとも，好意に対する礼を尽す立前からは一括整理の上，書架上も独立した資料群として別置配架することが望ましいとされよう。しかも利点としてはその全容を視覚に捉えうるという便がある。然し全蔵書の統一ある保管利用のシステムを考える立場からは，旧蔵者の栄誉を記念することとは別に，実際の保管利用に即した物つまり情報源としての処理を区別して考える必要がある。研究室はさておき図書館ではとりわけ昭和37年1月からＮＤＣ（改訂7版）による新分類の採用にふみ切っており，以来一貫して主題により書架分類による書庫内のグルーピングを基本として実施して来た。従って余程の事情の無い限りこれらの新収コレクションは分散配架を原則とせざるを得なくなっている。尤も別架混架のいずれにせよ文庫扱いのこれらコレクションは一部の文庫を除いて殆んど独立した固有の目録をもたないため，実際の利用に当っては一般蔵書と同様カード目録の検索か，文庫別置のものについてはかつ書架原簿の使用による以外に方法はない。このような特殊コレクションの取扱いについては，特定の文庫よりもむしろＯＥＣＤや国連関係資料の如き，共同研究の対象になるような資料群の扱いにこそ問題が多い。図書館における取扱いの具体例としては古く星文庫（星亨氏），望月文庫（望月軍四郎氏），小山内文庫（小山内薫氏），福澤文庫，田中文庫（田中萃一郎氏）等五大特別文庫と称される明治大正そして昭和初期までのものについては分類も配架も一般蔵書と分離し独立したコレクションとしているが，それ以降は幸田文庫（幸田成友氏）の如き質量共に大型コレクションですら，洋装本は一般書架へ混架配列する手段が採られている。次に最近研究室書庫を含め書架スペースの狭隘が甚しく，これを緩和するためにも必要以外の図書の重複をさけたいとする観点から，特殊コレクションの受入に当っては特にその点に留意し，重複部分の活用を計る線で努力がなされている。これらのことも文庫設定を考える上での重要なポイントとなる。

さて図書館所蔵の文庫乃至それに準ずる特殊コレクションについては「全国特殊コレクション要覧」（昭和32年国立国会図書館刊・近く改訂版上梓の予定）に掲出してあるが，上記五文庫のほか泉鏡花文庫，幸田文庫等16にすぎず，未掲載は20余を数える。（文庫としての条件不備のため）。同様に研究室蔵書中の特殊文庫は凡そ30に近いが，それぞれに所蔵の学部学科を異にし，かつ研究者主体にその利用に制限もあって，上記要覧への報告を割愛した。凡そ文庫と称されるものの魅力は何と云ってもそのもつ内容の優秀性，稀覯性にある。特に旧蔵者が碩学の誉れの高い学者のそれは正に珠玉の秘宝とも讃えられようか。従来も折にふれ事に処して紹介解説がなされては来たが，具眼の士も多いこととて笈底に眠らせることのないよう活用されることを期待したい。

（三田情報センター副所長）

資料 I

昭和50年度私立大学研究設備整備費補助金による購入図書資料一覧

図書資料名	巻号，年，etc.	数量	金額（千円）	代表申請者
・Music and Letters	1920-1954	1 set	504	商学部助教授 徳永隆男
・Archiv für Musikwissenschaft	Jg. 1-8 (1918-1926)	1 set	156	
・Corpus Mensurabilis Musicae	CMM 1-70	1 set	1,725	
・Dissertations on Library Science	152 items in 152 reels 1930-1972	1 set	500	文学部教授 小林胖
・静嘉堂文庫所蔵 歌学資料集成 第一編総記	35ミリポジティブ 50リール	1 set	330	文学部教授 西村亨
・Bernice Pauahi Bishop Museum of Polynesian Ethnology and Natural History. Honolulu Bulletin.	Reprint	1 set	419	文学部教授 伊藤清司
・American Anthropological Association Memoirs.	Nos. 1-96 Reprint of 1905-1963	1 set	295	
・Burlington Magazine. London	Reprint of 1903-1948	1 set	952	文学部教授 西川新次
・Münchner Jahrbuch der bildenden Kunst	Bd. 1-13 (1924-1938)	1 set	200	
・Landwirtschaftliche Jahrbücher	Bd. 51-93 (1916-1944)	1 set	700	経済学部教授 小尾恵一郎
・Public Finance. Part 1	1789-1860	1 set	570	
・Der Sozial-Demokrat, Berlin	Dez. 15, 1864-Apr. 30, 1871	1 set	420	
・Arbeit und Wirtschaft	Jg. 2-11 (1924-1931)			
・L'Humanite Clandestine		1 set	150	
・Vestnik Statistiki	Reprint of 1949-1962	1 set	193	
・William and Mary Quarterly. Series 3	Vols. 1-20 (1944-1963)	1 set	220	
・Monthly Bulletin of Agricultural Economics and Statistics. Rome	Reprint of 1952-1969	1 set	335	

図書資料名	巻号，年，etc.	数量	金額（千円）	代表申請者
・U. S. Federal Trade Commission. Decisions	Vols. 1-76 (1915-1969)	1 set	360	
・The New American State Papers. Pt. L. Commerce	47 vols	1 set	900	
・Harvard Business Review Library.	Series 1-8	1 set	340	
・"Blue Books" (Irish Univ. Press ed.) Industrial Relations.	Vols. 26,28,30-34,37-44	1 set	590	商学部教授
American Management Association Publications.				藤沢益夫
・Financial Management Series	10 vols			
・Marketing Series	11 vols	1 set	180	
・Office Management Series	12 vols			
・Banker's Magazine	Bd. 1-25,33-47 (1844-65,1873-87)	1 set	350	
・United States Code Annotated		1 set	600	
・Lloyd's Law Reports	31 vols. (1959-1974)	1 set	263	
・Ta Kung Pao	Tientsin-Peiping (NP 826) Nov. 1,1929-July 26,1937 32 reels HongKong (NP 63) Aug. 13,1938-Dec. 13,1941 11 reels Chungking (NP 823) Aug. 1-31,1941, Mar. 5,1942-Dec. 19,1946 11 reels	1 set	250	法学部教授
・Autonius A Butrio. Commentaria in Quinque Libris Decretalium	5 vols	1 set	113	田口精一
・Joannes Andreae J. C. Bononiensis. Fons ettuba juris-In quinque Decretalium libros Novella Commentaria	4 vols	1 set	100	
・Meet the Press		1 set	130	
・Journal of Taxation	Vols. 1-40 Reprint of 1954-1974	1 set	295	
・Politische Vierteljahresschrift	Jg. 1-14 (1960-1973)	1 set	270	
・Survey. Journal of East and West Studies	Nos. 37-77 (1956-1970)	1 set	160	
・Chemical Abstracts. 8th Collective Index	1967-1971	1 set	1,000	工学部教授 阿部芳郎

私大研究設備補助金の復活要求について

私大の研究者が永い間杖とも柱とも頼んでいた「研究設備補助金」の一般整備費部分が，昭和50年度を最後として，打切られることとなった。経常費に対する国の補助が拡大したことに伴って関連の補助金の整理・統合が進められた結果とられた措置である。文部省当局によるこの突然の措置は，関係者に強い衝撃を与えている。

昭和28年に創設され，昭和32年の法律（私立大学の研究設備に対する国の補助に関する法律）によって確立された『私立大学研究設備整備費等補助金』は，制定されてから20年余りにわたって私学の学術の振興に大きく貢献してきた。この補助金は，(1) 研究設備整備費と，(2) 情報処理関係設備の二つに大別され，研究設備整備費は更に①一般設備費補助（一個又は一組の価格が百万円＜図書は十万円＞以上一千万円未満の設備）と②特別設備（一個又は一組の価格が一千万円以上の設備）の二つに区分されている。

以上の項目の中で最も重要で，しかも制度そのものの根幹をなしているのは，いうまでもなく百万円以上一千万円未満の設備を補助する一般設備費である。学術の基礎的研究活動に必要な設備を補助するこの項目についてその実際の活用状況をみると，昭和50年度の研究設備補助金申請件数3,584件中，実に3,383件（94.4%）がこれによって占められている。私大研究者の間にこのように根深く定着していた一般設備費が突如姿を消したわけである。

私大側では，昭和52年度からのこの補助金の復活を求めて目下文部省と折衝中である。私学三団体（私大連盟，私大協会，私大懇話会）の代表で構成する「私立大学振興政策委員会」は，臨時に「私大研究設備補助金対策委員会」（委員長は久野塾長）を設け，復活要求理由書をまとめて去る7月19日文部省担当官と協議した。復活要求が果たして実現するかどうかはなお予断を許さないが，今後の事態の推移については関係者一同一致してこれを注意深く見守る必要がある。

理由書の概略は以下の通りである。

1. 一般設備費の重要性について

研究設備補助金申請件数中，一般設備費の申請が圧倒的に多いという事実は，この補助金の必要度の高さを示すと同時に，その基盤の上に多くの学術基礎研究体制が組まれていることを明確に立証している。これの削除はこれまで私大が年次計画に基づいて進めてきた学術基礎研究の基盤充実のための方途を失わせ，研究条件の悪化を招き，国・公立大学と私大との格差を一層拡大する恐れがある。この結果，我が国の学術振興に重大な支障をきたすこととなって「私立大学の研究設備に対する国の補助に関する法律」の立法の目的に反することとなる。

2. 一般設備費と科学研究費との関係について

文部省は，一般設備費の打切りに伴う代替措置として私学研究費の枠内に5億円の予算措置を講じたが，研究設備補助金と科学研究費とではそれぞれの目的が異なる以上，おのずから交付対象も限定されてくる。従って，科学研究費の特別枠は一般設備費の代替措置とはならない。

3. 一般設備費と経常費補助金との関係について

経常費補助金は，「私学振興助成法」にその法的根拠を置くが，この法律の目的は私学の教育条件の維持・向上並びに在学児童，生徒，学生，幼児の修学上の経済的負担の軽減を図ると共に私学の経営の健全性を高め，もって私学の健全な発達に資することにある。従って，経常費補助金の性格は立法の主旨からみて研究設備補助金の性格とは基本的に異なるものであり，両者は別個の補助金制度である。

事実，経常費補助金は人件費を含む教育条件の維持・向上等に支出されているのが実情であって，学術研究条件の維持・向上については研究設備補助金に負うところが大である。

資料 II

年次統計要覧 <昭和50年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <50年度実績及び51年度予算>

年度 / 支部センター	50年度実績 <単位：円>			51年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	**59,555,038**	**74,828,040**	**134,383,078**	**85,771**	**92,598**	**178,369**
図書館	58,955,038	625,955	59,580,993	85,771	1,178	86,949
研究室*	—	74,202,085	74,202,085	—	91,420	91,420
指定寄付金	600,000	—	600,000			
(私大研究設備)	(9,168,550)		**			
日吉情報センター	**10,271,801**	**20,754,892**	**31,026,693**	**12,407**	**25,960**	**38,367**
図書館	9,871,801	974,197	10,845,998	12,407	1,150	13,557
研究室*	—	19,780,695	19,780,695	—	24,810	24,810
指定寄付金	400,000		400,000			
(私大研究設備)	(2,384,190)		**			
医学情報センター	**28,417,597**	**1,141,660**	**29,559,257**			
〃	27,226,497	1,141,660	28,368,157	**35,496**	**1,200**	**36,696**
指定寄付金	1,191,100	—	1,191,100			
理工学情報センター	**28,753,540**	**593,178**	**29,346,718**			
〃	19,595,790	593,178	20,188,968	**25,560**	**680**	**26,240**
数理工学科新設	9,157,750	—	9,157,750			
管理工学科委託		(550,780)	**			
(私大研究設備)	(1,000,000)		**			
合計	**126,997,976**	**97,317,770**	**224,315,746**	**159,234**	**120,438**	**279,672**

注) * 特別図書費は含まず

** (　) 内は合計欄には加算せず

Ⅱ—1) 蔵 書 統 計 <年間受入及び所蔵冊数>

	支部センター＼内訳	単行本 和	単行本 洋	単行本 (計)	製本雑誌 和	製本雑誌 洋	製本雑誌 (計)	合計
年間受入冊数	三田情報センター	9,889	12,129	22,018	5,601	2,567	8,168	30,186
	図書館	5,278	4,653	9,931	1,658	694	2,352	12,283
	研究室	4,611	7,476	12,087	3,943	1,873	5,816	17,903
	日吉情報センター	4,962	3,347	8,309	831	1,021	1,852	10,161
	図書館	3,123	204	3,327	569	2	571	3,898
	研究室	1,839	3,143	4,982	262	1,019	1,281	6,263
	医学情報センター	422	171	593	1,140	3,139	4,279	4,872
	理工学情報センター	258	511	769	2,987	5,118	8,105	8,874
	合計	15,531	16,158	31,689	10,559	11,845	22,404	54,093
所蔵冊数(累計)	三田情報センター	387,366	298,531	685,897	90,438	83,532	173,970	859,867
	図書館	303,268	189,425	492,693	56,553	28,344	84,897	577,590
	研究室	84,098	109,106	193,204	33,885	55,188	89,073	282,277
	日吉情報センター	106,955	57,818	164,773	10,048	14,270	24,318	189,091
	図書館	72,034	5,922	77,956	6,107	99	6,206	84,162
	研究室	34,921	51,896	86,817	3,941	14,171	18,112	104.929
	医学情報センター	15,062	18,044	33,106	30,843	57,281	88,124	121,230
	理工学情報センター	19,419	11,292	30,711	16,860	43,572	60,432	91,143
	合計	528,802	385,685	914,487	148,189	198,655	346,844	1,261,331

Ⅱ—2) 蔵 書 統 計 <逐次刊行物：カレントタイトル数>

	和 雑 誌	洋 雑 誌	(計)
三田情報センター	3,994	1,874	5,865
図書館	1,434	495	1,929
研究室	2,557	1,379	3,936
日吉情報センター	334	400	734
図書館	219	10	229
研究室	115	390	505
医学情報センター	920	947	1,867
理工学情報センター	932	1,015	1,947
(計)	6,180	4,236	10,416

<研究・教育情報センター協議会委員> 昭和51年6月現在

情報センター所長	高鳥正夫	商学部 教授	安達和夫
文学部長	三雲夏生	医学部 教授	牛場大蔵
経済学部長	大熊一郎	同上	斎藤成司
法学部長	石川忠雄	工学部 教授	宮地邦夫
商学部長	白石孝	同上	国尾武
医学部長	嶋井和世	文学部教授（大社）	横山寧夫
工学部長	森為可	塾監局長	鎌田義郎
社会学研究料委員長	村井実	日吉情報センター所長	三沢進
文学部 教授	森岡敬一郎	医学情報センター所長	保崎秀夫
同上	小林胖	理工学情報センター所長	堀内敏夫
経済学部 教授	中村勝己	三田情報センター副所長	石川博道
同上	古田精司	日吉情報センター副所長	松井継三
法学部 教授	内山正熊	医学情報センター副所長	海老原正雄
同上	田中実	理工学情セ副所長代理	大沢充
商学部 教授	村田昭治	本部事務室長	安西郁夫

Ⅲ—1) 利 用 統 計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 / 支部センター	館外貸出 教職員	館外貸出 学生	館外貸出 (計)	館内閲覧	前年度比 館外貸出(計)
三田情報センター	10,352	50,879	61,231		0.91
図書館	6,810	47,736	54,546	60,516*	0.91
研究室	3,542	3,143	6,685	開架	0.89
日吉情報センター	2,928	16,469	19,397		1.54
図書館	1,024	16,469	17,493	14,406	1.68
研究室	1,904	—	1,904	開架	0.87
医学情報センター	—	—	29,897	全開架	0.91
理工学情報センター	—	—	9,630	全開架	0.78

* 他に貴重書閲覧：2,172冊 / 150人

Ⅲ—2) 利 用 統 計 <相互貸借（複写依頼を含む）>

内訳 / 支部センター	依頼をうけた(貸) 国内	依頼をうけた(貸) 国外	依頼した(借) 国内	依頼した(借) 国外	合計
三田情報センター	367	1	109	218	584
日吉情報センター	57	—	69	—	126
医学情報センター	13,283	174	2,150	112	15,719
理工学情報センター	17,907	—	1,119	105	19,131
合計	31,614	175	3,447	435	35,560

Ⅲ—3) 利 用 統 計 <複写サービス>

内訳 / 支部センター	学内 件数	学内 枚数	学外 件数	学外 枚数	(計) 件数	(計) 枚数	MF
三田情報センター	26,923	582,294*	555	20,437	27,478	602,731	39 件
日吉情報センター	—	52,615	69	1,251	—	53,866	1,382コマ
医学情報センター	54,322	480,268	24,385	156,074	78,707	636,342	2,854コマ
理工学情報センター	21,583	358,988	17,907	165,590	39,490	524,578	—

* 他にリコピー 140,210枚 / 778件及びＰＰＣ237,425枚

編集後記

◇去る6月の人事異動の影響によって，『KULIC』の編集委員の半数が交代しました。編集委員は各地区から1名づつと本部から2名の計6名がこれを担当することになっています。6名中3名が新顔というきわめてフレッシュな陣容で今後の編集に取組むことになります。ご期待下さい。

◇今号では，『私の研究とライブラリー』というテーマの下にライブラリーが研究活動にどうコミットできるのかという点を模索してみました。<ライブラリーは大学機能の直接部門である研究活動を支えることによって，これに直接的な貢献をなし得ているのか>，<学事部門に属するライブラリーの学事に対する貢献は直接的といえるのか，それとも間接的というべきか>，<大学組織の中のライブラリーが果たす役割や機能と個人研究者の要求との調和をどこに求めるべきなのか>，…等々，古くて新しい問題の検討にこのテーマが新しい刺激を与えることができれば幸いです。ロー・ライブラリアンやローカル・ランゲージ・スペシャリストの必要性が認識され，それが現実の舞台に登場してくる過程は，ライブラリーが研究・教育に対して間接的に貢献する段階から，直接的に貢献する段階へと脱皮していく過程に他ならないものといえるかもしれません。

◇書籍の流通問題はより良いライブラリー・サービスを実現するシステムの中で，極めて重要な位置を占めています。内外の書籍とも我が国では流通に多くの問題が存在しているにも拘らず，これまでそれが表面化することはあまりありませんでした。今回，小論が2編寄せられたのを機会に，今後この問題が大いに論ぜられ，改善の方向に向かうことを期待する次第です。

◇東芝の高山正也君の小論は，ライブラリーが一所に孤立していては満足に機能し得ない欠陥を指摘したものといえます。機能と規模の異なるライブラリー間の相互の協力の仕方について，この小論は一つの行き方を示したものといえるでしょう。（中島記）

編集委員

渋川雅俊（情報センター本部）
中島紘一（同　上）
鈴木富弥夫（三田情報センター）
加藤孝明（日吉情報センター）
佐藤和貴（医学情報センター）
小川治之（理工学情報センター）